

聖グロリアーナはいい  
物だ。

ハナのTV

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遙か遠い未来。宇宙世紀すら過去となった未来ではかつてのMSと言う機動兵器を駆ることが乙女の嗜みとなっていた。学園コロニーが乱立し、それぞれが群雄割拠するMS道全国大会。

戦車道の代わりに一年戦争のMSを駆る乙女のMS道全コロニー大会準決勝戦。聖グロリアーナのMS道クラブは黒森峰と対峙するが、その展望は暗い物であった。性能差に、尖り過ぎた機体群……対するは最高のMSとエースを従える西住流。

しかし、「それでも」と彼女達は奮起した。誇りと熟練の腕、そして僅かな可能性にか

# 目次

戦いは真面目に行うものだ	1
いいお応えでしょ？	17
YESと言いなさい	31
バトルクライ	48
試合開始	60
グロリアーナの盾	73
格闘戦	85
機動戦	97



## 戦いは真面目に行うものだ

MS道。それは0079、一年戦争と呼ばれた時代のMSを駆る乙女の嗜みである。戦場で女性と言うのは男根主義の軍隊から見れば、いささか違和感のある者にみえるが、MS道では違う。

この時代を生きたエースたちに女性も連なっており、何より伝説となった二人のニュータイプを導いたのは女性であった。それも10代の少女が、である。MS道はそんな女性を育成を目的とした武道である。

MS。宇宙世紀0079から実戦に投入され始めた二足歩行兵器であり、現在でも使用されている。

その戦いはかつて血みどろの殺戮を欲しいままにしたMSがカーボンと特殊塗装、コックピットブロックの完全なる防御力の実現を以って、戦争を試合に変え、戦闘は青春劇へと。そして、幾多のドラマが生まれていった。

△

聖グロリアーナ女子学院コロニーはフロンティアサイドをモデルとしたコロニーで

ある。豊かな自然と格式を求めた建築物の数々。21世紀のロンドンの様に時計塔やタワーブリッジを模倣し、電気駆動のエレカーの個人所有が最盛期の中で、二段バスが走る珍しいコロニーなのだ。

淑女育成、お嬢様学校としての所以か。ブティックやパン屋に至るまでレベルが高く、聖グロリアーナに来れば紅茶の香りがお出迎え、と言った具合に他校から尊敬の念を抱かれている。

その学園サイドのグロリアーナコロニーから離れたグロリアーナⅢコロニー。様々な地形を模した場所で人影がいくつか。とは言っても、そのサイズは人間と比べてケタ違いに大きい。全高18mにも及ぶ青を基調とした機体色、両肩のスパイクが威圧的な一つ目の巨人である。

二機が睨みあい、間合いを測る。赤のリボンが巻かれた方は楯を構え、右手にヒート剣を携える。もう一機は頭頂部の角が白い。左手を相手に向けたまま動かず、無手の右手を身体の影に隠している。

「今日こそー」

リボン付きが先に動いた。一気に駆け出し、接近する。ヒート剣を相手の脳天目に向けて振り下ろすべく、走るリボン付きに白ツノは発砲した。左手の指先から75mm砲弾をはじきだし、けん制。リボン付きは楯で易々と防ぎ一気に必殺の間合いに飛び込ん

だ。白兵戦を目的として開発されたMS07Bグフの運動性を最大限に發揮し、ヒート剣を脳天目がけて振り下ろした。

「甘いぞー！ バニラー！」

それに対する白ツノの動きは驚くべきものだった。逆にリボン付きのグフに張り付くように接近したと思うと、スライディングの要領で、足元をすくったのだ。バランスを崩されたバニラー機が宙を舞った時、白ツノは振り返ると同時にヒートロッド、電撃鞭の横薙ぎを放ち、コックピット部分にぶち当てる。

「うわっー！」

コックピット内の温度は1°Cも上がらなかつたが、その破壊力はカメラで見、身体で感じられた。実際には違うがヒートロッドの熱を体が誤認してバニラーは悲鳴を上げる。動力パイプとコックピットの表面装甲が食いちぎられたように破壊され、蒼い巨人は重力に従って墮ちた。

その瞬間バニラー機から白旗が上がった。地響きを金属の悲鳴と共に叫ばせ、派手な土煙を空中高く放り上げ、ヒート剣が主人を失ったことを悲しむようにオレンジ色の輝きを失う。その攻防たるや、圧巻の一言であった。

まだムーバルフレームすらない一年戦争の機体を人間のように動かすのは動力系の瞬時の切り替えが必要である。それを白ツノは、戦闘中にやってのけたのだ。その判断

力と技術はベテランのジオン兵を思わせるが、動かすパイロットは予想しえない人物であった。コックピットが開いて中からノーマルスーツを着込んだ少女が出てくる。

ヘルメットを脱げば、三つ編みのサイドテールの髪の毛が現れ、整った卵型の顔立ちが美しい。少女は新鮮な空気を吸い込んで、エアコンの利いたコロニー内の新鮮な空気を味わい、汗で蒸れた体を低めの気温で冷まそうと、ノーマルスーツの前を開ける。

『はしたないわよ。ルクリリ』

「すいません。ダージリン様。ここまで持ちこむのに、動力を絞っていたので……」

『貴方の動きも戦術も称賛に値するけれど、聖グロリアーナはあくまで優雅によ。早く戻ってきなさい。ペコのお茶が冷めてしまうわ』

「はい。ダージリン様」

通信が終わり、ルクリリは前だけ締めて、再びコックピット内へ。扱い慣れた操縦かゝんを握りしめ、グフを歩かせる。リボン付きも回復し、それに追従する。

「流石はルクリリさんですね。ヒートロッドを使わせれば、我が校きつての実力です」

「ありがとう。でも、それだけじゃ足りない」

「というと？」

「次の試合相手だよ。黒森峰さ」

「ああ」とバナラが力なく返事した。バナラ機のグフはモノアイでルクリリ機と自機を



交互に見やる。自身のない目の動きだった。弱気で不安に満ちた目にルクリリは不満を覚えたが、状況の厳しさをルクリリは理解している。故にバニラを咎めたり、あてのない激励を贈るようなマネはしない。

「敵は常勝の黒森峰。機体スペックではこちらが不利ですものね……」

「ああ。黒森峰の機体と同世代の機体はダーズリン様だけ。勝つなら、他の何かが必要だ。だが私達はニュータイプじゃない。超人的な能力で勝つなんて事は望めない」  
「勝てるでしょうか？」

「馬鹿」

ルクリリはコックピット内に張り付けた写真を一枚とる。それは、自分が初めて聖グロリアーナのグフに搭乗した時の物。ノーマルスーツを着込んだ仲間達と共に歩んだ最初の一步目の記憶。そこにはダーズリンとアッサムも混じっていた。

「勝つんだよ」

森を抜けて、休憩場所へ。半球状のドームの周りには主力機であるグフが鎮座しており、主を待つ騎士の荘厳さを見せつけている。だが、それは同時にルクリリの心境を複雑な物へと変えた。

自分が愛する機体、自分の誇り。この機体が相手に劣っている。信じたくないが、受け入れなくてはならない。そして、なればこそルクリリは不名誉に終わるわけにはいか

なかった。だが、果たしてそれが可能か。ルクリリは込み上げる不安にため息を吐く。

「遅かったわねルクリリ」

「紅茶もうできますわよ」

「はい、今行きます」

そして、ルクリリを出迎えたのは二機のMS。アッサムの白いMS—07B—3グフカスタム。そして、聖グロリアーナで唯一のビーム兵器を有するYMS—15ギャン。ギャンのコックピットから降り立つダーズリンを目で追う。自分と違い、自信に満ちた彼女にルクリリは、ああなりたいものだ、と内心思うのであった。

とはいえ、準決勝まで残り三日を切っている。時間がないことにルクリリは焦りを隠せないでいた。

△

ドーム内ではノーマルスーツ姿の乙女たちがカップを片手に談笑していた。話しに華を咲かせ、1G程度の重力下で飲む紅茶は宇宙とは違って味と香りを十分に楽しめる。何よりパック詰めとは違って気品がある。

「やはり、紅茶はカップで飲むのに限りますわ」

「そんな事言ったら、宙域戦のローズヒップ隊達に怒られますわよ。いい加減、ストロー越しは嫌だって」

華やかなグフ乗り達がそんな冗談を交えて、一口。聖グロリアーナのMS道履修者達の一歩の楽しみである紅茶は地球産の高級品である。故にか、戦闘の熱を浴びた心に落ち着きを与え、体をリラククスさせてくれている。

ルクリリもその中の一人で椅子に体を預け、重力に逆らわずにいた。それでも、最低限の礼節を守るべく、姿勢を崩さないでいたのは流石である。

「ルクリリさん、御代わりは？」

「ありがとうペコ」

そこへ小柄な少女が一人。緋色の髪の毛をダージリンのように後ろで纏めた、可憐な少女で、小さな体格だが誰よりも粘り強く、一年生でありながら聖グロリアーナで首魁役を務めるほどで、「小さな戦車」を思わせる少女だ。

この人柄の良さで人気もあり、また紅茶の腕前も神の域である。ルクリリはカップに注いでもらった紅茶の琥珀色に見惚れつつ、口をつけた。

「どうですか、練習のほうは？」

「皆いい腕さ。これだけのグフ乗りが居れば、オデッサの激戦だつてジオンに勝利を与えられるよ」

「連邦敵にあらず、ですか」

「それを言ったのはティアンム艦隊だろ？ 最も、今回の相手もオデッサ時の戦力なら

……話は簡単なんだけどな」

ペコは困った顔をして、返答に詰まった。ルクリリは言いすぎたことを後悔し「悪かった」と一言謝罪する。それは今の聖グロリアーナの面々に深々と突き刺さっている事実で、紅茶を飲んでいる時ですら、脳裏にこびりついている。

勝ちたい。それは競技を行う者以外でも共通の感情であるかも知れない。だが、勝つために超えるべき壁がとつともなく巨大であった時、人はその欲求を持ち続けていられるだろうか。もし戦う前から、勝敗が決していると思つた時、人は戦えるのか。

沈痛な表情のまま、ルクリリはノーマルスーツの手首に付けられた端末に触れる。立体映像が現れて、メールや通話などの様々なアプリが表示される中、聖グロリアーナMS道の資料にタップする。

現れたのは次の相手である黒森峰の戦力。映し出される映像に次々とMSが現れ、それを見るたびに重力がより一層肩に強く押し掛かってくるのを感じた。一年戦争ではかなりの大型で豚の鼻を思わせる口が特徴のMS。ジオン公国の悲劇の傑作機、MS-14系列―ゲルググ。

ビームライフルを標準装備し、機体スペックもあのガンダムに勝るとも劣らない程の量産機。バックパックなどで容易に機体仕様を変更でき、そのバリエーションはザクにも匹敵する。

スペックで見れば、格闘戦に持ちこんで何とか抵抗できるというのが聖グロリアーナの現状である。だが、それも完全に圧倒できるのはギャンのみ。出力差、ビーム兵器の有無を覆すほどの物ではないし、陸戦主体のグフは勿論、ギャンでは空間戦闘に持ち込まれた場合手も足もでない。

そして、今年の黒森峰には人材が豊富だ。

「色付きのゲルググが多いですね」

「エースの証だつてな。一部ではキマイラ隊の再来だつて言われている」

西住流の後継者の西住まほのYMS-14を筆頭に、逸見エリカ、赤星小梅、直下、この四人のエースパイロットの実力は本物だ。

「全く、頭が痛くなるな」

「ええ、本当に……」

ルクリリが紅茶をもう一口、とカップを口に運んでいると、突然、ドームが大きく揺れた。周囲のメンバーも何事かとキョロキョロ周りを見回す。デブリでもぶつかつたのか、と思っているとドームの入り口が開き、犯人が全速力で駆けて来た。聖グロリアーナの宇宙MS隊隊長である赤毛を真ん中で分けたチャーミングなじやじや馬娘が。

「ぎげんようですわ！ 皆さま！ ローズヒップただいま帰還しましたわ！」

「待ってくだ……さい……」

出たな、聖グロの宇宙組。その首魁であるローズヒップが断りもなくルクリリの向かいの席に座り、オレンジペコに紅茶をもらう。そして、彼女の副官である薫子がグロツキーな体を動かし、倒れるようにテーブルに突っ伏した。知的なブルネットの髪の毛がセツトが崩れて、可哀想に見える。

「お前なあ」

「あれ？ ルクリリさん。髪型変えましたの？」

「変えてないよ。また、変な着地したろ。あの機体は繊細なんだから、もう少し丁寧に扱えよな」

「急がないとお紅茶が冷めてしまいますわ！ ですから、超特急で来ましたわ！」

皆が真剣に考えている中、どうして、このお転婆娘はいつもと変わらないのか。ルクリリはこの変わらなさをいつそ清々しく思えた。そして、ドームの外をグフのモノアイで端末越しに確認した。

斜面をスライディングするように降り立っているのは二機のMS。スカイブルーの華奢なボディにドムを思わせる十字のモノアイレールの中央にモノアイスリットがある。それこそ、聖グロリアーナの唯一の“マシな”空間戦闘が可能なMS、EMS—10ツダである。

よくも、あんな細い足を一切痛めることなくああも派手な着地が出来るものだ、とル

クリリは感心する。繊細な技術がなければできないのだが、目の前で紅茶をジョッキに入れたビールのように飲み干すローズヒップを見るとルクリリはつい自分の見る目に自信を無くしそうになった。

「ホント、何でお前があんな腕前を發揮できるのか、分からないよ」

「お褒めに預かり、光栄ですわ！」

「……真つ直ぐなローズヒップさんの性格が出てるからじゃないですか？」

「ペコさんにも褒められましたわ！」

そう言つて、ローズヒップはオレンジペコに抱き付き、キャツキャツと頬ずりをします。その様を見て、ドーム内の空気がいくらか明るくなつたのか。話が弾みだした。

「ローズヒップさんも相変わらずですね」

「その昔、生の感情をむき出しにするのはゴミだとか言っている人が居たそうですが、彼女を見たら、そんな事言えなくなるでしょうね」

ニルギリがローズヒップにそんな感想を述べる。メガネが魅力を引きたてている彼女は口元を手で覆い、笑っている。

「あれで、もう少し落ち着きがあれば……」

「ローズヒップだからさ」

笑い声があがる。さつきよりも大きく、そしてその輪が広がっていくのを皆が感じ

取った。続々とツダ隊が戻り、何を話しているのかを聞いて、更に話が弾む。ローズヒップが太陽のようで、皆に元気を分けたのか。

「いい雰囲気になりましたね」

「ああ、ローズヒップの素直さのなせる業だな。ああ言う所は見習いたいな」

「お茶の作法はいいんですか？」

「ペコ、ちよつとヒドイぞ」

二人が話している間にも、ローズヒップが明るさを広めていく。

「薫子が上から来たのを、こうドーンと加速して、下方向にギューン！そして模擬弾が後ろから迫ってくるのを私、見ずに感じましたのよ！こう、キュピーンって！」

「嘘おっしやい、ニュータイプでもないのに」

「いつもの動物的勘でしょう」

「ヒドイですわー！」

「全く」

薫子が復活し、立ちあがる。

「相手するコッチとしては手に負えませんよ。ああ、こんな事ならグフ乗りに……」

「でも、薫子途中からリミッター外して楽しんでましたわよ」

「ああ、アレは振動とかスリルが楽しい……とかじゃなくて！貴女が速いから追いつ



くためにしてるだけで！」

薫子が腕を回して必死に抗議するが、周囲は茶化すだけ。ツダに乗ったらローズヒップと変わらないお嬢様の滑稽さはいつも通りでルクリリは安心した。これこそ、紅茶の園だ。同じ目的を持ち、同じ学校に通う仲間達とのひと時を楽しむ憩いの場。

今一度ダーズリンティーを飲めば、数分前とは格段と味に深みを感じられる。その味わいは精神の均衡と心を軽くした時に得られる至高の味だ。もつと味わいたい、もつと長くこの場に皆といたい。そう願うが、それができるのも残りわずかな紅茶と時間の問題である。

ルクリリは空になったカップの底を覗き見て、想いが飛び出しそうになった。それを拳をキュツと握ることで耐える。勝てばいい、勝てばもつとこの時間を共有できるのだ。敬愛するあの人達と――

「そう言えば、ダーズリン様はどこのですの？」

「ああ、そう言えば見ないが……」

ローズヒップの問いにハツとなつて気が付くと、オレンジペコがほほ笑みながら答えてくれた。

「ダーズリン様なら、アッサム様とデータ管理室へ行かれましたよ。熱心に二人で資料を探っている様でした」

「何を探しているんですの?」

「勝つための策、でしようかね?」

皆が顔を見合った。勝つための策、そんな物があるのか。エースぞろいの黒森峰のゲルググ隊を倒す秘策が。確かにスベック差があっても勝つことは可能だ。かつてのゾン残党は旧型の機体でジェガンなどの最新鋭機に立ち向かったと言う。だが、あれは奇襲と信念から来る狂気が彼らの底力と合致しただけに過ぎない。第一、死なば諸共の精神主義は相手を道連れにするだけに終わるし、何より聖グロリアーナの伝統と思想に反する。

ならば全員がニュータイプになれば、とでも言うのだろうか。それも非現実的である。そんな夢物語を信じる程、彼女達は子供ではなかった。

「でも、今はダーズリン様を信じましょう」

「ペコ……」

「大丈夫です。紅茶と格言が好きで、ちよっぴり変人で、偏屈で、負けず嫌いで、偶に壺がどうか言いだして……」

「ペ、ペコさん?」

オレンジペコが一瞬間に落ちかけたのを止め、オレンジペコは真っ直ぐな目で言い合った。

「でも、ダージリン様はきつと活路を作る人です。あの方はいつだって機体のせいにも、ましては人のせいにしたこともありません。だから、きつと……」

「ありがとうね、ペコ」

そこまで言っていると、急にドアが開かれてノーマルスーツを着たダージリンとアツサムが入って来た。オレンジペコは顔を真っ赤にして、「し、失礼しました」と上ずった声で答えて、ルクリリの後ろに引つ込もうとするが、ダージリンが先回りしてそれを許さない。

「ペコ、こんな言葉を知っている？ 『好転する前には、悪化するという段階もあり得る』」

「チャールズですね……あ、あの先ほどはですね」

「私としてはもつと言って欲しかったのだけれど……貴女のそう言う顔を見たくなくて、つい出てしまいましたわ」

「私は止めたんですよ。ペコさん」

「あら、そうだったかしら？ アツサム」

はあ、とため息を吐くアツサムを横目にダージリンは全員に振り返る。

「さて、先ほどの言葉の意味だけ。次の試合はコロニー戦に決定したわ」

「コロニー戦……！」

その言葉にメンバー達はざわついた。コロニー戦。宙域と重力が残るコロニー内のいわば地上と宇宙の双方を組み合わせたルール。ルクリリは苦虫を噛み潰したような顔を見せる。

こちらの宙域での戦闘が可能なのはツダ6機とギャンのみ。明らかに不利なルールではないか。面々は重い空気になり、勝機が永遠に失われたことを知った。

しかし、ただ一人を除いて、だが。

「何を勘違いしているのか、分かるけど。私、これは好機だと思っていますのよ皆さま」

「好機?」

「そうよ」

ダージリンはニコリと微笑み、言い放った。

「千載一遇の勝機。黒森峰を倒し——私達に勝利を。興味のほどはいかがかしら?」

いいお応えでしよ？

明りを消した資料室に聖グロリアーナのMS道クラブの面々は映写機の移す映像に皆釘付けになっていた。これから相手をする黒森峰の戦力を改めて見る為に、ダージリンの言う勝機があるのかを見る為に、皆が、ローズヒップですら静かにして集中する。

真っ白なスクリーンに映し出されるのは黒森峰のこれまでの試合映像。彼らのMS隊は聖グロリアーナではお目にかかれない高性能機ばかりであった。知波単のザクⅡF2が小隊単位で果敢に突撃する。

「この一撃を受けよー！」

MS戦を想定された後期生産型のザクの乗り手は戦術はともかく、個人の技量としては流石で、バツタのように飛んでは接近し、必殺のヒートホークを振りかざす。だが、それを受け止めるのに相手は片手一本で足りる。

ヒートホークを持つ手をマニユピレータで受け止め、F2のコックピット部分が無慈悲に貫くは一条の光線。歯牙にもかけない、感情を一切感じさせないデスマシーンと化したMS-14ゲルググに背筋が凍る。

モノアイの無機質な輝きは聖グロのグフのそれよりも凶悪に思えた。映像が切り替

われれば、ザクが次々と撃ち落とされていく。必死に回避行動を取り、デブリを盾に前進しようとするザク達が高出力のメガ粒子砲か、正確で破壊的な粒子が次々と屠られていく。

「狙撃?! どこから?!」

「おのれえ! かくなる上は全機突撃し……」

ツノ付きがそうはなったところで、デブリの壁ごしに光の矢が突き刺さった。

「隊長殿!」

「小癩なマネを!」

その小癩な犯人は三つ目の狙撃用レンズを装備したブルーのゲルググだ。赤星の恐るべき射撃に前進を阻まれたところで、八機のザクの上方から、ビームライフルが二条放たれ、〃三機〃が直撃。残る機体がザクマシンガンを連射し、迎撃しようとするが現れた二機のゲルググに照準が追いつかない。

「よく狙え!」

「速い! 速いであります! 副長殿!」

曳光弾が虚しく虚空を飛んで行き、倒せなかった代償を払うこととなった。バックパックを装備した赤と黒の高軌道型ゲルググがビームナギナタを通りすがりに振って、ザクを両断。仇を取ろうとザク二機がマシンガンを向けるが、そこへ、もう一機のゲル

ググが現れた。いつの間にか下へと回り込んでいたのに、ザクが気づくには遅すぎた。

まず一機目を下から殴りつけてガードを上げた所をスパイクシールドで頭部をもぎ取った。オイルが飛び散り、ゲルググMの頭部を血みたいに染め上げ、砕け散ったカメラレンズが下手人の鬼様な立ち振る舞いを反射する。

見るだけで喉がカラカラに乾く。メタリックグレーの機体が悪魔のようで恐ろしく、続く二機目を見ることすらせずにライフルで貫いた。

そして、頭部を失ったザクにグレネードを張り付けて、残るザク隊に蹴りつけ、三機をひとまとめに爆破。反応炉ごと吹き飛ばすことで、ザク三機は融合炉の誘爆と推進剤の入り混じったオレンジ色の光に消えて行った。

破壊の美学を実践している。見る者すべてが計算された暴力とそれを可能とする実力に目が離せない。

残ったのは無傷のコックピットブロックのみ。何の戦闘能力のないそれを下らなそうに一瞥するメタリックグレーのゲルググMはまさに悪鬼と言うにふさわしく、五機墜の名譽に浸ることなく、次なる獲物を求め、加速。スラスターの青い光跡が美しい曲線を描き、三機のゲルググは自分らの隊長の元へと飛んで行く。

そして、その先に見えたのは赤いゲルググ。彼女の周りには7機のザクが無残な姿に成り果てて、宙をさまようデブリの一つにされていた。そして、そこから飛び立つ様は

まさに彗星。気高く、孤高で、気品に満ちた赤い彗星であった。

映像が終わり、部屋に明りが点けられる。メンバーの表情は様々である。冷汗をかいたり、口をへの字にしたり、俯く者と様々。ルクリリなどは頭を抱え、瞼の裏で幻視した映像を振り払おうとしていた。

何の抵抗も出来ずに落とされていくツダに、地を這う虫けらのように踏みつぶされていくグフ。剣を交えることなく、ただ向かつてくる標的以外の価値も見出されずに、コロニーに転がる——そんな屈辱的な事があつてたまるか。

しかし、想いとは別に脳は予想される現実を嘲笑うかのように見せてくる。誇りも、友情も完全なる力の前では無力だと言わんばかりに。

ツダもグフもゲルググの前では性能が不足している。何より、グフの場合は宇宙で溺れてしまう。コロニー戦となれば宙域戦闘は必須。宙域で僅かなツダが落とされれば、後背から残ったグフを挟み撃ちにゲルググの波が押し寄せてくる。

ツダ隊の技量は確かだが、あの機体はどうあがいても失敗兵器でしかない。額面通りのスペックを最大に發揮して戦うことが出来ない上に数で負けているとあつては勝敗を語るのには難しくない。各個撃破の危機。知波単よりも危機的状況だ。

「さて、皆さま。コレを見て、どういった感想をお持ちに？」

ダージリンの茶目つけが今は恨めしい。聖グロリアーナの乗り手たちはこぞつて、ネ



ガティブな反応を示そうとした時、「ハイ！」と声が上がった。

「ローズヒップ」

「はい！ ダージン様！ よーするに当たらなければどうって事はないのですわね！？」

ほぼ全員が崩れ落ちた。正反対、真逆、超楽観的！ 「アラ？」と本人は周囲の反応に小首を傾げている。

「アレを見てどうしてそう思えるんですか?!」

「ええ、だつて皆ビームライフルで狙い撃ちされているから、全部躲せばよいのでございましょう?」

副官の薫子にもそんな事を返すローズヒップにグフ乗り達は脱力しそうになる。もしかしたら、実はローズヒップはとんでもないニュータイプで、自分達の理解も追いつかない次元にいるのか、そんな事すら思う程である。

「だから！ あんなのと当たつたら、確実に……」

「別に黒森峰の皆が皆、色付きゲルググじやありませんし、何とかありますわ！ ツダの加速は宇宙一なのですわ！」

「バラバラになるでしょうが！」

薫子はそう言ったが、その手が興奮で震え、頬が紅潮していることにルクリリは頭痛

を覚える。限界まで加速すると空中分解するジオン最悪の欠陥機E M S—10ツダにほれ込んだ阿保共の小芝居にこれ以上付き合ってもらえるか。ルクリリは挙手して意見具申を求めた。

「何かしら？ ルクリリ」

「ダーズリン様、意見を述べても？」

「構わないわ」

「ローズヒップのアホは置いておくとして、私としては……その、この映像からどう勝機があるかを見るのが理解しかねます。どうか、それを……」

「答えはローズヒップも言った通りなのだけれど」

「躲せてことですか？」

「ええ、敵のエースをね。それに、相手がゲルググばかりって状況は場合によってはかなりコチラにとって有利だと思わなくて？」

ピクリとルクリリの脳にひらめく物が生まれた。

「ゲルググが黒森峰の弱点になると？」

と訊くのはニルギリ。ダーズリンはただカップを持ちあげるだけ。しかし、その笑みに否定の色はない。そして、ダーズリンはサファイアブルーの瞳で全員を射抜いた。

「私達は私達の戦をする。それだけのことよ」

ダージリンはカップをテーブルに置き、立つ。そして、語る。

「こんな言葉を知っている？ 『土壇場を乗り切るのは勇猛さじゃないわ。冷静な計算の上に立った捨て身の精神よ』 私は今から考えうる全ての勝機を貴女方に話しましょう。しかし、その上で問わなくてはならないわ」

靴音が響き、ダージリンはメンバーの中央まで行く。各々が道を開けて、進んでいくのは紅海を歩いたモーセのようだ。そして、当然、ダージリンの歩みには一切の迷いが無い。

「私達には必要な素質が揃っている。技量もある。誇りもある。機体もある……相手を貫くための矛には困らないでしょう。しかし、全ての資質は勇気がなければ、何の意味もない」

勇氣。それは欠けていたピースであることは間違いない。負けるような試合で誰が勇気を振るえるものか。絶望や諦観は形ばかりの感情をいともたやすく砕いてしまう。だが、もし勝機があるならば、どうなる？

そして、この場に居る全員が信頼するダージリンがそれを語るとすれば、どう応えるべきか。

皆その答えを知っている。

「機体性能差は覆しましょう」

「そうだ。彼女達はグフとツダを知り尽くしている。何を嘆くのか。

「数の差など些末事」

「そうだ。いつだって、彼女達は戦い抜いてきた。強豪として。立ちこめていた臆病な心が生み出した幻、霧。それが晴れていく。」

「さて問いますわ。賽は投げる前に。貴女方にその資質はおあり？」

「そこで全員が手を上げる。今一度、剣を握るために。」

勝つために。

△

暗黒の空を十二隻の艦隊が進む。ジオンのシンボルとも言えるムサイ級の軽巡洋艦に囲まれ、旗艦として中央に配置されるのは旧時代のスペースシャトルを大型にし、砲台を取りつけた戦艦、ザンジバル級グリューネワルト。

焦げ茶色の船体には黒森峰の校章が映え、その周囲をゲルググが舞う。グレーと深緑の大型MSの描く軌道はさながら彗星のようで、艦内レストルームからも、その弧を見ることが出来る。

「青い燃焼反応の星、ね」

推進剤の化学反応が生み出す流星を目で追う。虎の皮が敷かれたソファに身を沈めて宇宙に手を伸ばす女子が一人。美しい白い髪の毛の少女は後ろから見れば、年相応の

可憐さだが、彼女を正面から見ると、今度は灰の狼を思わせる孤高さが垣間見れる。

逸見エリカは外を飛ばずググを見て、独り苦笑する。キレイじゃない。あんな弧の描き方はキレイじゃない。機体の性能で強引に曲がっているだけだ。あんな無理な動き方じゃ、ザクで動いたらきつとデブリ帯での戦闘なんて出来っこないだろう。

エリカは長い人差し指で自分の理想とする軌道を描く。キャンパスに絵筆で好きな絵を描くように。

「あ、いたいた副長」

「直下」

「また、此処で宇宙のお絵かきですか？ 副長の描く軌道なんて再現するのが難しいんですから。他人に期待するだけ無駄ですよ」

「隊長とアンタならできるじゃない」

「生憎と私は真似っこばかりが上手いだけです。軌道ならみほさんが一番上手かったですし……」

「何の用？」

エリカは遮り、きつそうな目で直下を見る。直下は仕方なさそうにため息を吐いて、タブレットを手渡した。そこには黒森峰に追加される戦力の細かなデータがびっしりと詰まっっていて、あまりの情報量の多さにエリカも最初は面倒くさそうに頭を掻いてい

たが、読み進めていくうちに、熱中し最後には放り投げた。

「ちよつと」

「下らない。また新型？ 誰が乗るのよ」

「西住流分家の三年生様ですよ」

「次の試合まで三日もないのよ？ 慣らし運転なしでF1カー乗ろうって話じゃない」

エリカは無然として言ったが、直下は飄々としていた。

「そういうえば、かつてのアバオアクーも間に合わなくてゲルググが大して活躍しませんでしたねえ。こんな話を言葉を知っている？ 歴史は繰り返す！」

「ダージリンの真似？ 強いて言うなら『賢者は歴史に学び、愚か物は経験に学ぶ』ね」

直下は「似てる」と言つて膝を叩いて笑うが、エリカは不機嫌なまま。冗談じゃない——かつてのジオンの失敗を何故黒森峰が再現しなくてはならないのか。エリカは右往左往する黒森峰のお上達に苛立ちを隠せない。

先の知波単もそうだ。F2ザクに接近を許されるどころか、撃破された者もいた。確かにF2型のザクはいい機体であるし、スペックの差を埋める戦法などいくらでもある。だが、それを反省せずに、新型の導入とは！ 短慮すぎる者達の浅はかな考えだ。

「でもーな」

直下がソファに倒れ込み、冗談めかして言った。

「何が？」

「だってガルバルディにゲルググJですよ？ 乗ってみたいと思いませんか？」

「アンタにはカラー付きの高機動型ゲルググがあるじゃない」

「副長、もしかして小つちやい頃は他人の新しい玩具には興味ない子でした？」

「うつとおしく自慢されなきゃ、気にしないわ」

「ああ、さいですか」

ゲルググJにガルバルディα。ジオンの後期MSでも最も高い位置に属するMSである。ガルバルディはその後のティターンズでも同系統の機体が作成され、ゲルググJなどはゲルググの中では最高の性能を誇ると言っている。

性能だけなら、グフやギャンなど圧倒できる。無論、性能だけなら、の話だ。

「……知波単にやられた経験じゃあ、カウントされないのでしょうね」

「……そうね」

直下は皮肉っぽく言った。此処のところ、黒森峰の動向はおかしくなっていると暗に言っているようである。エリカもそれに同調せざるを得ないのが、口惜しかった。10連覇を達成できなかつたあの日から、黒森峰は絶対に勝つための戦力を揃える努力を惜しまなくなったのだが、それがいつしか人材の育成を離れ、マシンスペックに比重を置くようになったと感じるのはエリカたちに限った話ではない。

前回の敗戦によって西住流の権威に多少なりとも傷がつき、その分家たちがこぞつて調子に乗りだし、気が付けば上の三年生の中で派閥が出来上がっている始末。おかげで、余分な新型機が参入してきて、補給や整備に支障をきたし、慣れない機体で出撃されては、お守りまでさせられている。

「エリカさん、前回何機倒しました？」

「10機」

「私は7機です」

二人は同時に頭を抱えた。今年の黒森峰はエースたちが数多くいる、と評判だがエリカはそれこそがおかしな話だと思っている。撃墜数が多いエースと言えば、聞こえはい。だが、戦闘の理想とは全員がことに当たり、無理な活躍をしなくていい状況下で優位に進めることであり、エースが多いとは即ち、そのエースに過剰な敵を相手にさせている状況を作り出していることなのだ。

「あーあ。ゲルググ乗ってF2相手に圧される黒森峰ですねえ」

「見抜かれてなきやいいわね」

連邦の白い悪魔など、その一例だ。ホワイトベース単艦で各地を突破しなくてはならないが故に大勢を相手しなくてはならなかったのだ。



普通に考えれば、知波単のザク隊相手に同数のゲルググがいて、ほんの数機ばかりが突出した戦績をはじめだすのがおかしい。

これが常勝黒森峰？ 王者の戦いか？ 指揮官の要望に応えず、勝手な機体ばかり増やしていく。宇宙を見上げれば、ガルバルデイが飛んでいる。その光跡にエリカは何も見出せない。惹かれない光跡は虚しく、あの流れ星のような跡を出せるのは此処にはまほだけだ。

胸が締め付けられる。エリカは一抹の寂しさを覚えた。

「もつと綺麗な星を描けるのに……」

「副長は描けていますよ。まほさんに完ぺきに追従出来ているじゃありませんか。綺麗な双子星ですよ」

「……そうかもね」

愛機のゲルググMを思う。初めて受け取ったゲルググは角もなく、指揮官用でもないゲルググMを誰かが言った。「角もないゲルググなんて」と「悪名高いゲルググMはアンタにピッタリよ」とも。

でも、エリカの脳裏には浮かぶ。「荒っぽいけど、粘り強い所がエリカさんらしい」と。一番、双子星と呼ばれるにふさわしい子の言葉が。

「エリカさんは……ずっとあの子に乗るんですよね？」

直下は砕けた口調で問う。  
「当然よ」

エリカは即答した。

## YESと言いなさい

宇宙は静粛で、厳格である。暗黒部室で暗く、空気もなく、およその生物が生きられる環境ではない。しかし、宇宙には生命に満ちている。遠く輝く星々の煌めきは新たな生命の礎となっているかもしれない。

何より、この地球圏で青く輝く母なる地球と太陽があるのだ。宇宙は生命を拒むのではなく、生命の揺り籠であるかも知れない。そんな星々の大海を五隻の艦船が進む。緑色のムサイ級と三隻のプア補給艦を引き連れる赤い重巡洋艦チベ級の一個艦隊にはティーポットが特徴の校章が描かれており、それが聖グロリアーナ所属であることを示している。

推進剤を燃やし、爆発的なエネルギーで航海しようと宇宙は静粛を保っているのだが、

艦内は違った。補給用のパイプでつながられたチベ級内では華やかな十代の少女たちが声を張り上げて、職務を全うしているのだ。

「どいて、どいて！」

「さあ、どんどん入れてください！ 補給物資の積み込み終わったら弾薬でしてよ！」

チベ級「キングオブアース」のハンガーに次々と物資が積まれていく。パプア補給艦から送られてくるコンテナで、ただでさえMSで狭い場所がより狭くなり、キャットウオークにまで物資が山積みになる。

此処にある全ては決戦の為の物資であり、勝利のための鍵である。故にか、いつもなら余計な物が無くて、広々としている艦内も今や戦争のような状況になっている。少しでも火力を、少しでも装備を、とパイロット達がかき集めて来た「武器」に事務はペンを動かし、手の空く者はひたすら積み込みと整理に追われているのだ。

他の艦船。ムサイ級「イオージマ」、「フオークランド」、「ダンケルク」、「ズールー」、「ノルマンディー」も同様の状況であり、通信は艦隊内でひっきりなしに行われ、オペレーターはパンク寸前になっている。

特にズールーなどではMSを艦体にワイヤーで固定し、物資を仕舞うと言った始末。宇宙空間に佇む陸戦型MSグフの滑稽な様は艦船を運用する操艦科の生徒達ですら苦笑してしまう。たかが、準決勝、されど準決勝。聖グロリアーナでこれ程までに余裕のない戦準備は過去例がない。

まさに総力戦である。

艦内は汗と香水、オイル、場所によっては紅茶の香りで充満し、普段はコスモバビロニアの貴族達を思わせるうら若き淑女たちの喧騒で賑わっている。

「こらあ！ 誰だ！ 不凍液の隣に茶葉を置いたのは?!」

「すいません、つい」

「後で、175mm砲弾磨きよー！」

それでも、聖グロリアーナの魂は忘れず、である。パック詰め茶葉を不凍液の隣に置いたことで怒鳴られる二年生なども現れる訳で、聖グロリアーナの面々は紅茶と機体の世話に大忙し。

ツダとグフの整備と調整はザクのように整備性に優れないために、中々終わらない。だが、それでも早く終わらせる者は居る者で、スカイブルーの華奢なMSツダから一人の少女が出てくる。

吉田薫子はツダの周りでフワフワと浮きながら、考える。後ろで結ったブルネットの髪の毛を弄り、思考するのは、戦闘法だ。あの高性能機ゲルググをツダで倒そうと言うのだから、思考への熱の入り方もいつもと違った。

「やつぱり……135mmで……でも、あれでも貫通出来るのか……」

思考する。撃墜される。試行する、撃墜。ツダのスペックと自分の腕前を天秤にかけて、少女は勝利のための方程式を探す。だが、それは難問である。永遠にインクがキレることのないペンを作るような物で、薫子は表情を曇らせる。

ゲルググ、ゲルググM、高機動型ゲルググ……ビーム兵器で武装し、頑強で機動性に

も優れた最高の量産機。空中分解事故でお蔵入りしたツダなど、本来なら並べる事すらおこがましい。

ゲルググのビームライフルの前ではツダの装甲など紙も同然。機動性でも額面のスペックで辛うじて追従できるツダに何ができるのか。悪魔の囁き同然に脳に浮かぶのは、全てを投げ出してしまいたくなる欲求と負ける恐怖だ。

薫子は頭を振って、邪念を追い払おうとする。

「やっぱり、私は……」

アウトオブコントロール。手に負えないのではないかと。否定的な発想が思考を阻害し、薫子は奥歯を噛みしめる。いつも、いつも纏わりつくネガティブ思考という亡霊が呪っているのでは、と錯覚するほどに。

「どうしたのですの？ 薫子」

そこへ、ローズヒップが跳んできた。無重力のハンガーでローズヒップは水を得た魚のように器用に薫子の前に来た。シャンプーの香りがする赤毛に薫子が気付き、その顔を中止する。

「いえ、その……考えてただけです」

「考える？ 何を？」

「そりや、勝ち方に決まつてるじゃないですか？」

「だから、当たらないきやいいんでございましょう」

「出来たら苦労しません」

正解だが超がつくほどの極論である。薫子はガクツと首を傾け、ローズヒップの樂觀的な考えに首を振る。

「ツダならできますわ！ 薫子ならもつと上手くできますわ！ ゲルググどころか、きつとりゲルググだつて余裕ですわよ！」

「ですから！ 私は貴女みたいに勘で躲せるほど上手くないんですつてばー」

「でもリミッター外したら楽しいでしょう！」

「それは認めますけど！ けど！」

薫子の頭にフラッシュバックが起こる。スーツ越しのG。モノアイ越しに見る流れる星に飛び込んでくるデブリ達。尻に感じる振動とスラストで軋むフレームにアラーム音がセクションを奏でてくれる。フリージャズより自由で、メタルより凶暴。脳髄に流れ込んでくる情報と危機感に酔いしれて、薫子はボウ、とトリップしかける。

「薫子？」

「えッ……いえいえ、なんでもありませんよ。ただ……」

「また、ネガティブですか？」

凶星を言い当てられて、薫子は赤面する。同時に自己嫌悪も。いつも、考えている事が顔に出てしまうことが彼女であった。故に、ローズヒップでなくても丸分かりで、ダーズリンなどに「ポーカーは出来ないわね」と言わしめた程である。

「ええ、その勝てるかな、って」

「大丈夫ですわよ！」

ローズヒップは薫子の肩を叩き、眩しい太陽の様な笑顔を見せる。

「ダーズリン様が言ったら勝つ！　そして、私達が速く速く飛べばいいだけですわ！」

聖グローの韋駄天の名を宇宙に弾けさせるのですわ！」

「ハジかれる」の間違いじゃあ」

「もっと明るい見方をしませんと！　ホラ、ニコリと笑ってくださいまし！　薫子がツダに乗ってる時みたいに！」

ローズヒップに口の端をつままれて薫子は変顔させられる。ジタバタと暴れる薫子と、じやれるローズヒップをハンガー内の仲間達は相変わらず、と言った風に特に気にも留めなかったが、この時の薫子はいつもと違った。

ローズヒップの変わらぬ姿に魅入られていた。淑女の作法や落ち着きのなさなど、到底聖グロリアーナの生徒には思えない、異色な彼女だが、大会3日前のこの時に見せる笑顔に曇りはない。



いつ何時でも変わらぬ姿勢と態度。機体性能を言い訳にしない、仲間を信じられる  
ローズヒップにダージリンに通じる物を見た気がした。

「何してんだ？」

「おお、ルクリリさん！ いい所に！ 薫子がしよげて元気ないのですわ！」

「どうせ、ツダ乗ればジャンキー薫子の姿に大変身だからいいだろ」

「ルクリリさん！」

「どうせ、サイコザクに乗りたいたいとか思ってたんだろ？」

「そんな……訳ないです！」

「何だ今の間は？」

四肢を切断すれば、素人ですらエース級の動きを発揮できる機体への愛情を持ちえる  
のか、薫子は恥じらいながら、想像し悶える。そこへ、ルクリリがツダに着地し、した  
り顔で薫子をそう評した。サイドテールの栗色の髪の毛をたなびかせ、薫子の抗議も何  
のその。

「どうしたんですの、ルクリリさん。いつもはプカプカ浮いて寝ているのに」

「グフ乗りは宇宙じゃ暇だからな。泳げないし、リックグフなんて物もないしね。唯の  
お話相手欲しさだよ」

「皮肉ばかりの癖にイ。バレーボールぶつけますよ」

「止めろ。それは私によく利く」

薫子がツダのコックピットから「ルクリリバスター」とマジックで書かれたバレーボールを抱えて出て来たので、ルクリリは苦虫を半ダースは嘔み潰したように顔を歪める。

「思い出したくもない……ザニーに後ろを取られてヒートホークを喰らうだなんて」

「しかも、その後クラッカーのアタック喰らいましたもんね」

「油断大敵ですわ！ てか、うっかりさんですわ！」

「うるさい！ 二度も騙されないからな！ 今度会ったらヒート剣で叩き切つてやる」

毛を逆立てた猫のようにルクリリが反論する。ザニー相手にムキになり過ぎな気がして苦笑する薫子だったが、もう一人の反応は違った。二度目、と聞いてローズヒップが目をぱちくりと、した。

「二度目って事は……ルクリリさんもやる気なのですね！」

「当り前だ。ダーズリン様の答えは聞いた。後は私達の答えを出すだけだ。黒森峰を下して、奴らにもう一度当たるぞ」

「でも、大洗が優勝戦に来るとは……」

薫子はそう言った。彼女の言う通り、大洗が優勝戦で当たるとは限らない。と言うよりは、来るとはとも思えない。旧式の機体だらけの大洗が順当に勝ち進んでも、次は

プラウダの連邦系MS隊。サンダースほどの安定した運用こそ出来ないが、高性能な主力機をもつプラウダが大洗が勝つとは考えにくい。

ちやうど、聖グロリアーナが次の試合で何も出来ずに終わると予想されているように。もつと言えば、聖グロ程の手練れもない大洗に正気などあろうはずがない。だが、ルクリリの答えは違った。ルクリリは薫子の額にデコピンをする。頭蓋骨が揺れたと思った薫子は苦悶の声を漏らす。

「イッタイですつて!」

「馬鹿! 大洗には勝ってもらうんだよ。機体性能なんかで試合が決められてたまるかっての!」

「でも……彼女等は……」

ヒリヒリと痛む額を抑えながら薫子が言うどルクリリは腰に手を当て、言い放つ。

「いいか薫子。これから私達が機体性能差をひっくり返そうって時にそんな事言うんじゃない。私は勝ちたいし、アイツにもう一度当たりたい。だから、そう願うし、叶えるんだ。そうだろ、ローズヒップ」

「そうですわ!」

「でも……」

「でもなんか言うな。『それでも!』だ」

ルクリリの瞳に強い光が宿る。『それでも』とは可能性の言葉だ。かつて、一人のニュータイプが言い放った不屈の言葉。かの者は可能性を信じ、戦い抜いたという。それは今の聖グロリアーナを状況を表す物なのかもしれない。現実とやりに屈するよりも、僅かな可能性に掛けるのは誇りある人間にとつての選択。

ダーズリンが選んだ道に、自分らが敬う彼女が選んだ道を選ばないことなど聖グロリアーナのMS道クラブはしない。打算的な卑怯者より、勇敢な愚か者になるかと言われるば少し違う。

緻密な計算と、腕前、僅かばかりの運が絡めば勝てる戦を行う者を愚か者と判断するべきではない。

「……敵いませんね」

薫子は独り呟いた。髪先を弄るのを止めて、身を翻したと思うと、ツダのコックピット内に器用に入っていた。シートに座り、ツダの通信装備でラジオの電波を拾うべく、周波数を合わせる。

「敵わないって何だ？ 黒森峰とか言うんじや……」

「貴女達にですよルクリリさん、ローズヒップ」

「やる気ですのね！ 薫子！」

「ええ」

機体スピーカーから、音楽が流れた。古いラブソングなのか、パークッションとピアノ、女性ヴォーカルの声が胸を突き抜けるような力強さに溢れている。「Y, E, S」の三つのアルファベットが並ぶことで、想い人への特別な意味が込められる歌だ。

「試合前にラブソングか？ その調子でいてくれよ薫子」

「YES」

「やっぱり、その顔が一番かわいいですわ！ 薫子！」

「YES！」

その日、初めて薫子は微笑んだ。十代の少女特有の幼さと大人っぽさが同居した笑顔はブルネットの美しい女の子だけでなく、彼女を笑顔にした二人も同じ顔をしていた。ダーズリンが見せた道、その道を歩くと決めた二人の仲間、薫子はその背中を見て、決心した。

自分もそうであろう、と。

ローズヒップのように恐れず、ルクリリのように不屈に。宇宙の暗闇に消えるより、勝利のための火になりたい。戦士は美しくあれ、二人はまさにその王道を言っているのだから。

それに応えるようにツダはモノアイを光らせ、主人に絶対の忠誠を誓う騎士のよう  
に、その命令が訪れるのを待っているように見えた。

△

場所は変わり、キングオブアーサー艦内、士官室。旧ジオンとコスモバビロニア主義のような高価な調度品と上質な木製のデスクやビリヤードまで完備されたこの場所では重力が働いていて、カップに熱い紅茶を注ぐことが出来る。

「どつどつ」

「ありがとうオレンジペコさん」

地球産の紅茶が注がれて、ニルギリはカップに視線を落とす。太陽を溶かしたような琥珀色の茶は香りと温かさで心を落ち着かせてくれ、砂糖を加えて味わえば、疲れを砂糖菓子のように甘く溶かしてくれる。

胸の内側から広がる温もりにほっと一息つけて、視線を上げれば美しく、本物のレディがいる。かつて、袖付きと称された者達の制服のデザインを取り入れた紅の制服に身を包んだダーズリンが蒼氷の瞳でニルギリにほほ笑んでいる。

「いい味わいでしょう？ 農業コロニーの茶葉もいいけど、やはり地球産はまた格別ね。ペコが淹れるお茶を飲むならば、私はこの茶葉を使いたいわ」

「そうですね。伝統に裏打ちされた味、と言った所でしようか？」

「そうですね」

薄く微笑むダージリンだが、ニルギリは反対に困り顔であった。なぜ、此処に呼ばれているかは理解しているのだが、その理由にニルギリは懐疑的であるからだ。眼鏡のレンズ越しに見えるダージリンにアッサム、オレンジペコはいつもと変わらぬ様子だが、それが一層彼女の不安を募らせている。そのことにもダージリンは気付いているだろうか？

「不安なのね、ニルギリ」

「わ、私は」

「分かるわ。貴女は不安になると、いつも紅茶に砂糖を多く淹れてしまうのだから」

ニルギリは思わず赤面するが、ダージリンは続ける。

「不安なのでしょう。今回貴女が扱う機体は前から黒森峰対策として、我がクラブ員にすら秘匿していたものどもの」

「……ええ。OB、OG会の反対を押し切ってまで手に入れましたから」

「貴女だけの一機のみとは言え、アレは十分に性能を発揮できるわ。黒森峰のゲルググはおろか、使い方によってはアレックスだろうと勝てると私は思っているわ」

「ええ、そうでしょう。しかし……」

ニルギリは目を泳がせ、決心しカップをティーソーサーに載せた。柔らかな絨毯を靴で踏みしめるようにして、ダージリンの瞳をまっすぐ見やる。覚悟を持って引き締め

る顔には精悍な戦士の貌がチラリと垣間見えた。

「だからこそ、思うのです。何故「私が」、と。そう思うのですダーズリン様」  
「どういう事かしら？」

ダーズリンの目に好奇心が宿る。敵意こそないが、一振りの剣のような光が射抜いてくる気がして、ニルギリは固唾を飲んで、語りだす。

「私は……器ではないと思うのです。私は貴女のように皆に慕われ、皆を統率できる力はありません。MSの腕もアツサム様やオレンジペコさん程でもなく、ローズヒップさんやルクリリさんのような気概を持っているかと言われると疑問です。だからこそ、あの機体には私ではなく、貴女の様な……」

ダーズリンはクスリと笑う。

「そうなの？ 私達の考えは違うのだけれど」

私「達」？ニルギリは最初、聞き間違いかと思ったが、ダーズリンが「ペコ、アツサム」と呼ぶと、二人が応え、オレンジペコはカップを片手に、アツサムはカップとタブレットを持って、ニルギリの元へ。

「貴女達のニルギリはどう思う？」

「だ、ダーズリン様」

「ハイ、今しがたニルギリさんが語った通り、人の長所を述べられる素敵の方だと思いま



す」

まずはオレンジペコが人柄について答える。オレンジペコは二人の会話を見て判断した。ニルギリの語りは、それは劣等感の表れと言うより、一種の尊敬であるようだった。他人の長所をハッキリと他人に述べる時のニルギリの表情は終始柔らかいものであった、と。

「自己を判断し、長所を見出すことこそ長所ですわニルギりさん」

「アツサム様」

「それにデータでもそれは証明されているわ。突出した物はないかもしれませんが、貴女程オールラウンドにMSを駆れる方は居ませんわ」

次にアツサムがタブレットの評価項目を見せ、客観的なデータを示した。それは公式試合の戦績から普段のお手合わせまで記録されており、平均的に非常に高レベルにまつまっている。

そして、最後にダージリンがその理由を述べた。

「貴女は確かに貴女の言う通りな人物なのかもしれないわ。でも、それこそが貴女の長所。貴女を理解するのは貴女をよく知るこの聖グロリアーナのみ。いいかしらニルギリ。貴女はエースではない。貴女はジョーカーなのよ。たった一人の絶対的な存在にして、相手の知らない強者。だから、貴女を選んだの、それにね」

ニルギリはダーズリンたちの言葉で心の迷いが晴れていくのを実感した。ちょうど、カップの中の紅茶のように優しく、心を温めてくれるようであった。そして、ダーズリンが放った。

「こんな言葉を知っている？ 『高貴な考えとともにある者は、決して孤独ではない』。アツサム扉を開けなさい」

「はい」

アツサムが端末を操作して、士官室の扉を解放した。エアロックが解放され、プシュッと音がしたと思うと、大きな音が士官室に響いた。何か、と見れば大勢のMS道クラブメイト達が扉に寄り掛かっていたために倒れているではないか。

「だから、寄り過ぎだと……」

「聞こえないから仕方ないでしょう！」

「士官室はそう言う部屋ですわ」

どうやら聞き耳を立てていたらしく、ニルギリは頭の回転が追いつかない。

「いけませんわよ、レディが聞き耳なんて」

「でも、ニルギリさんがこわいお顔で士官室に行くので……その、何があったのか知りたくて」

ダーズリンはニルギリの方へと振り返る。

「ね？ 皆、貴女が好きなのよ。だから、降りるなんて言わないで。貴女は私達に必要なのだから」

ニルギリはしばらく、何も言葉を口にしなかった。正確には出来ないでいた。自分のありようを示してくれた皆に感謝を示すことをしたかったが、その言葉を思いつけない。いや、言葉などでは言い表せない。

そこで、彼女は紅茶を口に一旦することにした。紅茶は冷めていたが、この時に飲む紅茶はおろそかには飲めなかった。ニルギリは一口、一口、味わった。

どこからか、聞こえるラブソングに耳を傾けながら。

## バトルクライ

コロニー戦。それは0079、12月14日より開始されたルビコン計画が元ネタと言われている。ルビコン計画はニュータイプ専用MSの奪取、破壊を目的とした物であり、そのMSがサイド6コロニーに存在すると発覚した時、コロニーの内と外でジオン公国と地球連邦軍が交戦していたのだ。

これを背景として作られたMS道公式試合のルールであり、このルールの利点としては地上用、宇宙用のMSの双方を使用が可能であるという点があり、当事者である選手たちにMSの適性による戦力差が広がらない、また観客には単調な試合ではなく、複雑で見ている飽きない試合を提供できる。

コロニーは試合用の物で、外壁をMSの火力で破壊することは不可能なので、地上戦が主力な学園にはまさに天恵とも言えるだろう。

しかし、前者に関しては懐疑的であると最近では言われている。今回の聖グロリアーナと黒森峰の試合を見ても、コロニーに大半の戦力を集中せざるを得ない聖グロリアーナに比べ、黒森峰は自由に戦力を配置できる。

つまるところ、最初に少数の宙域戦闘が可能なツダを殲滅し、コロニーの内で引きつ

けた敵陣をコロニー外から侵入させた部隊で後背を突くことができる点で黒森峰は優位なのだ。

これは地上、宇宙の両方で高い性能を発揮できるゲルググだからこそその戦術と言える。

地上用のグフでは宇宙をまっすぐ進むことさえ出来ず、機体の制御不能に陥って、宇宙に溺れるだけ。

そんなことは聖グロリアーナだけでなくとも分かる。

『……と言うことで、今回は非常に聖グロリアーナが不利ですねえ』

『では勝ち目はないと?』

『そうはいいいませんが、まあスペック差も大きいですし、常勝黒森峰に三十分も保てば、大したものでしょう』

ハンガーに固定されたグフの中で少女たちは憤る。スピーカーから聞こえる声は不愉快極まりないものだった。脂ぎってそうな親父の声、コメントーターの辛辣で“的外れ”な評価を聞き、ルクリリは鼻を一つ鳴らす。何が、三十分だ。それどころか、コッチは敵を討ち取りに来ていると言うのに。

試合開始前の挨拶をダーズリンたちがしている間、ルクリリたちは自機の通信装備や私物のタブレットや携帯端末で外の情報を得ていた。聞けば、ネガティブな批評に試合

の予想。1対9で聖グロリアーナの負け確実と言わんばかりの下馬評。

TV報道を見れば、ダージリンと西住まほが選手宣誓と最初の握手を交わしているが、その後ろではガルバルディαとゲルググJがこれ見よがしに威容を見せつけている。

赤い彗星を思わせるゲルググJにギャンとゲルググを混ぜた最新鋭機ガルバルディα。ルクリリは何故、それらがそこにいるのかを理解しかねた。

「前回、前々回と活躍した『色付き』はステージの外か？ 玩具の自慢だなんて黒森峰も子供っぽいじゃないか」

誇るのは名だたるエースではなく新鋭機と言うことにMS道履修生として、反発せざるを得なかった。乙女を育成する武道で、MSを見せて何になると言うのか。精々、新しい機体のお披露目でもしてるといい。

グフのコックピットに座り、紅茶のボトルを吸う。慣れ親しんだノーマルスーツを着込み、スティックを握り、固めのフッドペダルの感触を確かめ、愛機のご機嫌を伺う。何も問題はない、本当になにも。

闘気に満ちた精神と、興奮と緊張の波が体を引き締めてくれる。策も練った、昨日は茶柱すら立ったではないか、と自分に言い聞かせる。

『ルクリリさん』

「何だ？」

隣のグフから通信が届く。ルクリリ隊のキャディからのものだった。

『聞きました？ コロニー通信。私達の試合は狩人に狩られるだけですって』

「どうせ、ゲルググJ（イエーガー）から取った洒落だな。コメントとしては三流以下だな」

『全くです。それに狩るのが鹿か兎かと勘違いしている様ですね』

「ああ、そこら辺はゆっくりお話しなきゃな。ガンパウダーでな」

我ながら上手い洒落だとルクリリは思ったが、隊内の反応は苦笑、と芳しくなく少し不満を覚えた。

『……それはちよつと』

オレンジペコのコメントが来た途端に皆が笑いだすので、更にルクリリは機嫌を悪くした。人のネタを取るとは流石はオレンジペコ、ジョークセンスも一流であるらしい。

「緑茶談義も置いておいて、もうすぐ試合開始ですわ。気を引き締めませんと」

「アッサム様も加われればよろしいのに」

「流石に試合前に冗談は思いつきませんわ。全く、こういう事をしているから 聖グロリアーナに沈黙と空のカップなし」と言われるのですよ」

「そのデータは？」

「全コロニージョーク集25巻より、ですわ」

グフカスタムの白いアツサム機と青いオレンジペコ機がモノアイで見合い会話している。グフの姉妹が言いあっていようで何だか微笑ましく思えた。こういう時にこそ、聖グロリアーナの同胞たちは紅茶を欲した。会話と紅茶の楽しみ無くして聖グロリアーナを名乗る資格はない。

無重力の中でMSの固めのシートに身を預け、ベルトで固定した今カップに茶を注ぐことが出来ないのが悔やまれる。

「さて、では別のお話をしましょうか」

そこへ、ダージリンのギャンからの通信が全機に入った。宣誓を終えて、キングオブアーサーに戻って来たらしく、艦上に接地した機体から「お肌の触れ合い通信」を艦の強力な無線装置から送っているらしかった。

ここからは、お嬢様の茶なしのお茶会はしばらく禁止され、全員が戦士としての貌へと変わる。機体のスクリーンにマップを表示し、作戦領域内での行動をもう一度おさらいする。

「私達の目的は勝利。敵フラッグ機西住まほ機を撃破することにある。しかし、敵機体の戦力から見て、極めて不利な立場となるのは皆さまご承知ですわね？ 幸い、私達はコロニー内部の市街地に敵よりも先んじて布陣が可能となっている、今回はコレを利用



することが作戦の前提条件ね」

市街地のマップが拡大される。ビルやデパート、高速道路などの大型の建築物が多く、18mのMSも、この中に隠れられる程だ。今回のコロニーはかなり複雑であり、市街地だけでなく、ちよつとした山岳地帯まであり、地球の地上を出来る限り再現し、ただでさえ、コロニーの内壁などの地下トンネルもある中に、それらが入り交りついている。

オマケにこのコロニーは資源採掘用の物を改造した物で、巨大な岩塊に円筒状のコロニーを刺したような物。宙域ですら細かな岩片が漂っているのだ。

まさに具だくさんのシチュー、魔女の鍋と形容するに相応しい。

これこそが聖グロリアーナの希望であった。

「市街地にはルクリリ隊、ロシアン隊、キャラバン隊の三つの隊を配置し、二か所の山岳地帯にはラプサン隊とスーチョン隊を。敵の侵攻前に各員、迅速に迎撃態勢を整えて待機」

「了解」

重々しさにいがらっぽい声を出してしまい、ルクリリは口を抑えた。ダーズリンに「落ち着いて、ね」と嗜まられ、少し恥ずかしい。

「ダーズリン様、私達は？」

「忘れてないわよ。ローズヒップ」

ローズヒップの声が入り、ダージリンはツダ隊にも指令を送る。

「今回のコロニー戦は知つての通り、宇宙と地上の二面作戦。敵は必ず宙域部隊を送り、コチラの後背を突こうとする」

「敵が全部隊を宙域に置く可能性は？」

今度は薫子が訊く。声が若干震えており、安心を得たいようである。

「ないわね。黒森峰が恐れているのはコロニー内壁内でのゲリラ戦。私達に内壁でのゲリラ戦をしかけさせる暇を与えずに直接攻撃をかけてくるはず。市街地で私達を釘付けにし、その後背を機動力に優れた隊で急襲する。だから、ツダ隊にはこの宙域部隊の足止めを行ってもらうわ。ツダ隊の指揮はローズヒップ、貴女に一任するわ。出来るわね？」

「勿論でございますわ！」

「あと、独立部隊としてニルギリ。ローズヒップ達を助けてあげてね」

「お任せください」

ダージリンの凜とした声に二人が返す。この戦闘を前にこの堂々さ。ルクリリは拳を固く握った。ダージリンの作つた道しるべを信じ、勝利を得るための誓を込めるように。此処にいるのは旧式の機体と伝統に拘る思考停止のご令嬢ではない。

剣に誓つた強者たちだ。弾倉に弾は込めた、推進剤を満タンにした。ゲルググなど重

いヒート剣で敵を叩き切れば、済むことだ。一機残らず駆逐する、そんな気概で全員が満ちている。

「後は私達が勝利すれば、準決勝を突破できる。聖グロリアーナの悲願を、そしてこのMS道に蔓延する機体頼りの風潮を私達が払しょくする。赤いジャケットはレッドコートの誇りであり、西住流の赤ではない。夢の轍はまだ終わらせられない、私達はまだ進まなくてはならない」

夢の轍——いい言葉だ。その夢は人によつて様々かもしれない、だが今、此処を勝ちたいと願うのは誰もが同じことだろう。燃え尽きる事知らずに向かう。

「かつての、こんな言葉があるわ。『すべての大偉業は、最初は不可能といわれた』。しかし、今日私達はその最初の一步目となりましょう」

「トーマス・カーライル」とオレンジペコが呟いた。19世紀のイギリスの歴史家の言葉は波紋のように広がって、グフの瞳を灯した。全機、一斉にモノアイを起動させ、核融合炉に火を入れた。

「勝利を紅茶で祝いましょう」

その一言と同時にハンガーに赤色灯が灯され、艦全体が揺れる。いよいよ、だ。聖グロの乗り手たちはヘルメットを着用し、備える。

『接舷10分前！ ツダはカタパルトデッキへ！』

アナウンスの鋭い声が木霊する。カメラアイを左右に動かし、マニピレータを握っては離す。一機のツノ付きのツダがカタパルトデッキへと進む。一番機ローズヒップ機がデッキに足を固定させ、ルクリリの方を向いた。

「お先に失礼しますわよ！ ルクリリさん達も健闘を！」

「馬鹿！ 勝利を、だ！」

モノアイ越しの目くばせの後、ツダの背面の木星エンジンが火を噴きだし、推力をため込んでいく。高音のエンジン音が爆音を響かせたが、ハンガーは宇宙と同様の真空になってソレも消える。

ローズヒップの声を聞くのも、このハンガーが最後である。あとは試合後まで、互いに違う戦場を駆け抜けるのみ。サムズアップするツダにルクリリは敬礼し、それで最後の会話とした。

『ローズヒップ、ツダ一番機！ ダージリン様のため！ 戦場を切り開きますわ！』

『発艦！』

レールに沿ってカタパルトが走り出した。火花と激しい閃光をまき散らし、ツダのスカイブルーの機体を最高の加速と共に送り出す。強烈なGと宇宙への旅立ちに湧くローズヒップの歓声が上がリ、無重力の大海へと放たれたローズヒップ機はバレルロールを行って遙か彼方へ。

他のムサイから発艦した者達と共に、彗星の尾を残して戦場へと飛んで行く。

『二番機、薫子！ 聖グロリアーナの旗の下に！』

『三番機、クランベリー！ ダージリン様の為に！』

次々とツダたちが発進するのを見送る。一機一機、ローズヒップの元に集おうとする流星達は想いを乗せて戦場へ。飛び立った20機のツダが集結。円錐状に隊列を整え、中央のローズヒップ機から信号弾が上がる。

青に輝くそれは花火のようにパツと華を開かせた。特注した信号弾らしく、漆黒の宇宙に青いバラを咲かせたのだ。

「味なマネするじゃないか」

ルクリリ達はそれを捉え、ほほ笑んだ。その青いバラはダージリンの花であり、自分たちであった。これから奇跡を起こす自分達だと。

『接舷！』

キングオブアースーがコロニー港に乱暴に接舷する。シートが揺れて、汗の雫が宙を舞う。いよいよ、この時が来たか。ルクリリは声を張り上げる。

「make ready！」

「Make ready！」

備えよ！ と全機に叱咤すれば、戦乙女の華やかで荘厳な返答が帰ってくる。降下用

の下部ハッチが開く。今度は自分達だ。ルクリリはコロニー内壁を見つめ、降下ランプがグリーンになるのを待つ。これを最後の出撃にしないために、遥かなる勝利を掴むために。

ハンガーに重力が加わる。身体に1Gの重みが伝わり、栗色のサイドテールが垂れた。いよいよだな、と深呼吸をする。4つ数えて息を吸い、4つ数えて息を吐く。顔と心を引き締めれば、覚悟は完了する。

『進路オールクリア！ 発進ヨロシ！ 降下！ 降下！ 降下！』

『グリーンライト！』

ステイツクを前に倒し、いざ人口の大地へ。

「ルクリリ機！ 出撃する！ 我に続け！」

機体の固定フックが解除され、重力に従い降下を開始。大気に触れて機体が振動し、内壁を潜り、奥へ奥へと進めば、視界に光が差し込む。厚い岩壁を抜けた先に広がるコロニーのパノラマ。ミラーで反射された太陽光で生い茂る緑と、かつて人口密集地帯であったコンクリートジャングルがハッキリと視界に映され、決戦の地を前にして血がたぎった。

モノアイを左右に見渡せば、頼もしいブルーの一つ目の巨人グフが降下している。空気を切り裂き、重い機体を自由落下させ、指定高度でスラストを噴射。

重力の法に従って、かかる重みにルクリリは歯を食いしばって耐え、そのグフの巨大な両足を地面へと下ろす。市街地の一步手前に着地し、機械仕掛けのサイクロプスが粉塵と土砂を巻き上げて、遂に立った。

機体各部から冷却のために熱気が噴出され、破壊的な出力と共にモーターが回り、聖グロリアーナの騎士が舞い降りた。

次々と僚機が着地していき、行動を開始。

「時間がない！ 市街地での準備は全て完了させるんだ！ 今まで最も急いで正確にだ  
！」

『了解！』

ルクリリはビル群を背中に、敵が来るであろう方向を見やる。

来るなら来い。聖グロリアーナがどんなものか教えてやる。何故、紅茶を飲んでいるのかを教えてやる。

それは紅茶が 勇気を燃焼させる飲み物だからだ！

ルクリリのグフはヒート剣を引き抜き、十字架のように構えた。

## 試合開始

試合を中継する観測ポッド。ザク系統のモノアイを利用した望遠カメラに暗黒の空をいくつもの流れ星が映った。その星々は意志を持つているようであった。直線的な軌道ではあるものの、時折何かを避けるように蛇行し、常に三つ一組のデルタ隊形を組んでいる。そして、その流星は人の形をしていた。

推進剤を燃焼し、スラストアークから吐きだすエネルギーが機体を押し出す機動兵器MS。それら機動兵器の無機質なモノアイが映すのは試合会場となるコロニーだ。コロニーへと進軍するのは黒森峰のゲルググ隊で、その剛毅な見た目のMS群はただ暗い宇宙の海をまっすぐ進んでいた。

そして、その中にザンジバル級グリューネワルトから発艦したMS——西住隊のエース、逸見エリカが駆るゲルググMも存在している。

通常のゲルググとは異なる大きなトサカに、通常の半分の長さの角を持つメタリックグレーの機体は先を行く赤いゲルググを食い入るように見ていた。フラッグ機の西住まほのゲルググは既に敵を見据えているのか、一点のみを集中し、わき目もふらない。

「見えているのか、隊長は」



エリカはコックピートシートに座り、独語する。周囲の有象無象など歯牙にもかけない孤高さとエリカは感じたが、全てがエリカと同じ感想を抱くわけではない。機体の周波数を弄り、通信を拾えば、様々な思念が聞こえてくる。

『何よ、赤い機体になんか乗ってき。旧式のゲルググに』

『相手は西住流だ。去年の“アレ”でも名家は名家なんだよ』

『古くて色ついてりや偉いのかよ』

舌打ちを一つ。エリカは聞こえてくる邪念をシャットアウトし、後悔した。聞くべきじゃなかった。今の黒森峰の惨状を知って、頭痛を覚えるばかりで何も徳がない。統制と規律はあっても、邪気がある。鉄の意志に混ざり物があると言っている。

「何よ。グチグチと。シートについた頑固汚れみたいに」

吐き捨てた所でエリカもまた自分を恥じた。こうした感情もまた邪念だ。味方にイラつくことに何の意味がある。怒りはパワーになっても、それ自体はエネルギーの浪費に過ぎない。現にそれを不満を述べるばかりの彼女等が示しているではないか。赤いゲルググJなど特にそうだ。仮初の“赤”に乗ることしか、西住まほに近づくことが出来ないでいるのだ。

と、感情の整理をしていると、隣に紅と黒の高機動型ゲルググが近づき、肩に触れて来た。直下のゲルググがお肌の触れ合いをしてきたのだ。

「動きが硬いですよ副隊長。緊張してます?」

「な訳ないでしょ。後ろのガルバルディアに合わせているだけよ」

「見もしないくせによく位置と速度が分かるもんですねえ。それはそうと、私達はそろそろ、相手の裏取りを行うために隊を離れるんですが……」

「何よ?」

直下のゲルググのモノアイが泳ぐように動く。本人の意志をそのまま反映しているような動きにエリカは「器用ね」とだけ呟いたが、胸にざわつくモノをエリカも感じ取っていた。長年の勘と言うべきか、第六感が警告を発しているのだ。

「小梅が言うんです。コロニーがクモの巣みたいに感じるって……」

「何よそれ。あの子がニュータイプでもあるまいし、そんな事が」

「でも、勘はいいんですよ小梅は。それに……グロリアーナの母艦の動き、アレって市街地を目指した航路なんじゃないかって」

「それこそ、考えにくいわ」

エリカはブリーフィングでも想定された事態を直下に再確認するように述べた。敵の主力はあくまでグフとツダ。敵が行うとすれば、コロニー内壁内におけるゲリラ戦を展開し、格闘性能を生かせる限定空間で戦闘することであると考えられた。

内壁内は多少重力が薄いとは言え、重力下の戦闘は可能であるし、格闘性能に限れば

グフはゲルググに対抗できる。つまり、敵の狙いはツダ隊によって後背へと回るゲルググ隊を足止めし、その稼いだ時間内にゲリラ戦でフラッグ機を落とすというのが敵の狙いだろう。

だからこそ、宙域部隊に戦力を多めに割り、比較的少数の高速部隊の迅速を以って内壁内を制圧し、コロニー内で殲滅するのが作戦の主軸となる。直下や小梅と言ったエースを宙域に回すのも、敵の視線を釘付けにするべくフラッグ機をコロニー制圧隊に置くのも計算づくなのだ。

「相手のフラッグ機はダージリンのギャン。あの機体は空間戦闘が不得意だからコロニー内にいるはず。そして、その彼女の前に隊長がいけば、必ず姿を見せるわ」

「プライドにかけて、ってやつですか。ま、一騎打ちなら隊長は負けないし、護衛には最新型がゾロリ、エリカさんもいる……盤石ですよね？」

「多分ね。後は向うに聞きなさい」

直下が「向う？」と聞いたので、エリカはため息交じりに「聖グロに、よ」と言い直した。直下は気楽そうに笑って機体を翻した。

『直下！ 遅れるな！』

『ハイハイ！ エリカさん、ご武運を！』

踊るかのような華麗さで別れ、最後に敬礼だけを残して裏取りの部隊へと真紅のゲル

ググは飛んで行った。高機動型の面目躍如と言った所で、新型機の前輩にあつという間に追いつき、稲妻のように先頭へと推進剤の尾を伸ばして行った。

「相変わらず、ね」

あの素直な性格は見習いたい。エリカはシートに深くもたれて、思う。そうであれば、自分を、隊長を、この機体を、愚弄する者をもつと少なくなっていたのあろうか。今の新型機と旧型機が混在し、仲違いを起こしているような状況は避けられたのだろうか。

見ろ、今の隊列を。左右で旧来のゲルググとゲルググJとガルバルディαで綺麗に分かれている。これで来年辺りに旧来のゲルググが消えることがあれば、いよいよ黒森峰も凋落の日が近くなるだろう。

自らの腕に信頼を置けない黒森峰に何の価値がある？

『Fポイント通過。想定した時間より遅れている……各機増速。かつてのジオン公国の電撃戦を思い出せ。驚は舞い降りる……全機、我に続け』

そこへ、目が覚めるような言葉が聞こえた。西住まほの『我に続け』と聞いて、エリカはハツとなって身構えた。スティックを握る手に自然と力が入り、ゲルググMをまほの赤いゲルググの後ろにつけた。

来る！ 来る！ 消沈しかけていた心の炉に火がくべられた。かつて、自分が憧れた

伝説の一端。それをまほ隊長が行おうとしている。それは戦術的に、まほ機が先行することを選択したのに過ぎないが、エリカにとっては何よりの鼓舞であった。

バックパックもないまほのゲルググのスラスターがエネルギーをため込んでいる。エリカも愛機を同様に操作し、その背名に熱い視線を注ぐ。

『エリカ』

「は、はい！」

『あまり無理をするな。お前なら追従できるだろうが。その機体はお前にとって大切なはずだ』

「いえ、行かせていただきます」

『無理はするな。では、行くぞ』

赤いゲルググが爆発的な加速と共に宙を駆けだした。エリカも加速し、追従する。モノアイが見せる赤い彗星の光跡を追う。最初こそ、バックパックを装備しているゲルググが推進力で追いつくことは出来た。しかし、そこから本領発揮だった。

宙域に広がるデブリ帯に入った途端にまほ機は更なる加速を得ていく。コロニー外壁の破片、岩塊や艦船の残骸を蹴り、AMBACの姿勢制御のみでバランスを保ち、減速せずに宇宙のごみ捨て場を抜けていく。

接触すれば、一年戦争のMSなど一撃で破壊してしまうデブリ帯でのまほのセンスは

神業と言う言葉では到底足りない。一個、二個と蹴つては増速し、ロールとターン、手足を使い生身の様な重心制御で完べきにコントロールされ、見えていないはずのデブリすら彼女の危機となるどころか、彗星としての足掛かりにされてしまう。

「はやい……速い……」

彗星の描く弧にただ一機だけ、エリカだけが追いついていた。サラミス級の残骸をバレルロールで潜り抜け、メタリックグレーのゲルググMは前を往く星に手を伸ばす。

エリカも負けじと、デブリを蹴つては加速し、孤高な彗星に寄り添おうとするが、その距離は遠い。やかましく鳴り続ける接近警報をシャットアウトし、機体の姿勢制御に集中力を注ぎ、刻一刻と変わる宙域の状況に適応させるも、それだけで頭が焼きつく。

躲すだけならともかく、このデブリを最速で抜ける為に膨大な情報の処理と最適な回答をはじき出す。生身の人間に対する要求としては過酷な物だ。

絶えず微妙に動くデブリを回避し、足場に出来る物を瞬時に判断する——西住まほの頭には世界最高で最小のスーパーコンピューターでも内蔵されているのだろうか。そして、それをMSとして動かすと言うことは、ヒトの動作としてのラグも計算されていると言うことだ。

ゲルググMの右肩にデブリが掠った。それだけで大きく機体が右に傾き、体を揺さぶった。口に酸っぱい物が込み上げてくる内臓をシェイクするような加速Gに耐え、速

度と衝突への恐怖に抗い、研ぎ澄まされた神経全てを利用して、まほの肩を掴むことが出来ない。

西住流の「八艘跳び」とはよく言ったものだ。まほ機のゲルググはエリカ機を除く、後続機の三倍の速度を叩きだしている。だが、ヘルメットのレシーバーからはまほの苦悶の声一つ聞こえない。まほはあの殺人的な操縦を平然と行っているのだ。

星々の輝きが川のように繋がって見える程の高速移動を、この混沌とした宇宙の墓場の中で。

「これよ……これがそうだ！　これが見たかった……あの姿が黒森峰！　西住流！」

追いつけない。その事実によりエリカは頬を赤く染め、体の芯から漲る力の波に全身を震わせていた。悔しさ以上に興奮を覚えていたのだ。華麗なる宇宙を舞う姿。機体の舵取り、目の動き、全てが及ばない。この圧倒的な実力差に惚れないはずが無い。

まほのゲルググは先行生産型、バックパックもない旧式だ。しかし、この開きを見れば、誰が性能差で彼女に勝てると言えるだろうか。見れば、ゲルググJなどは遙か後方。同じ機体色でも格が違う。そして、それはエリカにとつても同じだ。自分ではたどり着けない神域だ。だが、だからこそ、愚かしくも目指す価値がある。

コロニー外壁を視界にとらえ、エリカはようやく赤い彗星の後ろ姿を間近にとらえる

ことが出来た。機体のインターフェイスが示すまほ機のIFFにほっと一息つこうとした時、まほのゲルググはそのままの速度でエリカに向けてビームライフルを放った。

「何?！」

ライフルの光条はエリカ機の前方を通り過ぎ、その空間に爆発が生じた。更にまほはライフルを微妙な感覚で撃つていき、その破壊光線を自らが通り抜けたデブリの海へと連射する。高出力のメガ粒子の戦が常闇の宇宙を奔り、パツと照らした。至る所で爆発の光球が生じていくことにエリカは目を見張った。

急いでIFFの応答を確認したが、全機応答しており、損傷報告も上がらない。まほは何を狙い撃ったか、それを理解した時、エリカはゾクリと背筋を凍らせた。彼女がどこまで行くのか、その行き先をまるで想像できなかつた。

高速機動中の狙撃を彼女はやったのだ。

『ギヤンのハイドポンプだ。各員、私の通った道を進め。ダージリンの機雷は広範囲に散布されている可能性がある。十分注意しろ』

機体を停止させ、まほのゲルググは早速内壁へと侵入を果たしていた。エリカのゲルググもそれに倣い、機体を内壁へと着地させる。赤いゲルググは無感動にゲート部分にビームライフルを二連射。ゲートは内圧であつという間にひしゃげて、宇宙空間へと変わり果てた姿で吹き飛ばされ、進入路が作られた。



『ルートは確保した。各機は予定通りに作戦行動を取れ。ここから先はミノフスキー濃度も濃くなる。長距離の通信は行えないことを考慮し、小隊ごとの連携を絶やすな』

淡々と指示を伝えるまほにエリカは続き、内壁内をモノアイセンサーで索敵する。トランプもなく、がらんどうとした内壁の様子を見て、エリカは違和感を覚えたが、まほは奥へと進む。

「隊長！ 先ほどは」

『エリカ。無理をするな、と言った。私に追いつくことばかりに夢中になって機雷に気付かないとは、らしくないな。ダージリンは抜け目がない。このような事があれば不意を突かれるぞ』

「申し訳ありません」

貴女の描く「星」に見惚れていた、などとは口が裂けても言えず、エリカは唯々赤面し、謝罪をした。まほのゲルググの単眼がコチラを向いているのに気付けば、心の奥まで除かれているのではないかと、少々不安を覚えたが、まほ機から発せられたのは温かな口調の声であった。

『だが、機動は見事だ。たった一年で私に追いつくとはな……そのマリーネも良い乗り手に恵まれて、喜んでることだろう』

「隊長……」

『さて、内部の制圧にかかろう。ツーマンセル。バックは任せたまぞ』

「ハイ！」

エリカは応え、ゲルググMの手にMMP80を構えてまほ機の後ろにつく。言葉こそ少ないものの、交わした通信にエリカは喜びを覚える。八艘跳びとまではいかないが、此処まで追いつける程度にはなり、それをまほ自身から称賛を貰えば、心も踊ると言うものだ。

それもツーマンセルのバックを命じられるとは、これは全幅の信頼を得たと言っても過言ではない。名誉ある務めを直接命令されるのは、まほに寄り添えたエリカのみ。現黒森峰でエリカだけが得た最高の榮譽だ。

だが、同時にざわつきを覚えた。先ほどの言葉と言い、今までの指示と言い、その言いざまは明らかに違った。先ほどの言い様は温かったのだ。まるで、西住みほと、あの子と話す時のように。

△

黒森峰が制圧に乗り出している頃、内壁内で片膝をつき、シートが被せられた一機の

MSがその動向を探っていた。赤外線やサーモから身をひそめる為のいわば迷彩シートに身を包むのは白いグフカスタム、アツサム機であった。

陸戦型のMSに装備可能なグラウンドソーナーとコロニーの内外に備え付けたカメラの映像を受け取り、その情報をアツサムは統合し、ダーズリンや各部隊長に流していた。「機雷による索敵は当たりましたわ。ダーズリン」

『そのようね。まほさんの勘から逃れる為にかなりの遠距離からの撮影だったけど上手くいったわね』

「内壁内でも使えばよろしかったのでは？」

『自らの退路を塞ぐ可能性もあるわ。それにアレは趣味じゃありませんのよ』

総隊長のご趣味にアツサムは肩をすくめた。ギャンに乗っておいて、自らの武装を好まないとは恐れ入る。だが、どの道アツサムにとってもそれは好都合であった。気にせず自分の武を振るえるのはパイロットとしては理想的な状況だ。

そして、此処まではダーズリンのオーダー通りだ。西住まほですら感知不能な範囲からの索敵。宇宙に流した観測ポッド「バロール」が拾ったのは「正確」にハイドポンプを狙撃し、破壊されてできた光球だ。

敵は主力をコロニー制圧に向けて来たことの証だ。出なければ、全てのハイドポンプを破壊する真似をまほはしない。

『それじゃあ、アッサム。ペコ。出来る限り場を引つ掻き回して、撤退を。特にペコ、貴女はこの後を考えて損傷を控えてね』

『はい、ダーズリン様……なるべくエースは避けて、上手く逃げるふりをして、ですね?』  
『大変よろしい。別に倒しても構わないのだけれど』

「(冗談)」

アッサムはそこで通信を切った。MSの足音にセンサーが反応したのだ。カメラの映像から見ると、後続の新型機らしかった。ガルバルディアの瘦せたゲルググのようなデザインが見え、狭い内壁内で成れていない様子だった。

「さて、始めませんと」

アッサムは思考する。データ的に敵の出力はコチラの遥か上を行く。装備もビーム兵器が主体で、普通なら逃げる所だ。だが、此処は狭所。重力も利く、限定空間なのだ。それなら、勝機がある。

シールドからヒート剣をゆっくりと引き抜く。ヒート化させない黒鉄色の幅広の太刀は鈍い輝きをモノアイを通してアッサムに見せつけていた。

「(こ厄介なお客様にはお帰りいただきますわ)」

アッサムは頭の中に計算式を打ち立て、計算し終えた。そして、グフカスタムが潜むエレベーターを起動させた。

## グロリアーナの盾

試合開始15分経過——まほ率いる黒森峰のMS隊はコロニーの内壁を制圧をほぼ完了しつつあった。これと言った抵抗もなく、ただ内壁内の通路を散歩しただけに終わったので黒森峰の乗り手たちは味気なさを感じると共に失望を露わにしていた。

『敵影なし……もぬけの殻ね』

『ゲリラ戦を選ばないとは、聖グロリアーナも耄碌したわね』

パイロットである以上、勝ちたいと同時に良い戦闘をしたいと思うのは性であるのだろうか。敵側にとって当然の策を選ばなかった事は即ち愚策をとったことになる。期待した者達は鼻白み、この先の試合が圧倒的勝利に終わることを疑わなかった。

接近戦を挑まないグフなど恐れるに足りない。機体の正しい運用を実践できない相手など、素人以下だ。こうなれば、聖グロリアーナなど兎だ。逃げることも出来ない、狩られるだけの兎でしかない。

それこそ聖グロリアーナの伝統の隊列を組んだ白兵戦術など、斉射三連で片がつくだろう。

評論家の予想通り、30分でケリがつくだろう。

『敵影なし。狭くて嫌になるわ』

『聖グロめ。グフ乗りしかいなくせにどういうつもりなのかしら?』

二機のゲルググJのモノアイカメラが左右に動き、狭い通路の中を索敵していく。頭高20mを超え、大きく肩が張り出しているゲルググにとっては、この内壁部は狭く、二機のパイロットは悪態を吐きながら進んでいた。

『微妙に二機が横並びに出来ない幅しかないだなんて、ホントにムカつくわ』

『それより、他はどこ行つたのよ』

『隊長と逸見は先に行つてたでしょ? 全く最新鋭のウチらばかりこんなしようもない索敵に駆り出させて、旧型共は街に先に行くだなんて……』

二人は不満は遠距離の通信が届かないことをこれ幸いにと不満を述べていった。新型を任せられた自分達が先陣を切る名誉を授かりべきだと信じて疑わなかった。それに、相手が聖グロ程度では先陣以外に功績を立てることは不可能。

内壁内に残ったガルバルディアαやゲルググJなどの新型8機の乗り手たちは功績を得る機会を奪われた形となつたと考え、やつかんでいた。後背に敵を残すことはない、と分かつてもまほを恨まざるをえない。

獲物の一番おいしいところを取られた猛獣の気分だった。

二機は進み、資材搬入口のエレベーターの傍まで来ると、そこにはガルバルディアαが

突っ立っていた。ライトグリーンの瘦せたゲルググの様なボディが目に入り、二機は暇そうにしている友軍機を前にして、手を振った。

『峰子じゃない。何やってんのさ、試合中にさぼっているとどやされちゃうぞー』

『こんな仕事暇なのも分かるけど、さっさと終わらせて聖グロを狩りに行かないと、取り分なくなるよ』

緊張感に欠いた声で呼びかけたが、峰子の機体は反応を示さなかった。背中を見せたままで、応答しようとしめない。通信機の故障か？ 先行していた一機が歩み寄り、肩に触れようとマニピレータを伸ばした。お肌の触れ合い通信なら声が聴ける、とそう判断したからだった。

ゲルググJの赤い腕が機体に触れて、乗り手は聞きだした。

『おい、ちゃんと返事しな——』

『首狩り兎ってご存じ？』

その時、ゲルググJのコックピットに聞いたことのない少女の声が響いた。ゲルググJは何事かと思つて、ガルバルデイのボディを引き寄せた。そこには、コックピットを器用に焼かれ、白旗を上げた無残な姿があり、その陰に怪しく光る一つ目があった。

『に、逃げ……！』

峰子の声が反響し、ゲルググに衝撃が走った。ガルバルデイの胴体から生えて来たオ

レンジ色の片刃の剣が左マニピレーターを切断したのだ。ゲルググJは驚きの余り、二歩分下がり、後ろの僚機と衝突する。

『ちよつと！』

『で、敵よ！ 敵が！』

こんな所に隠れているとは思わなかった新型機の乗り手たちは判断が遅れ、その隙を相手は見逃さなかった。ガルバルディの死体を押し倒し、白い敵機が猛然と走つて来た。歪曲したツノ付きのシオルダーでタツクルをし、下段に構えていたヒート剣を斬り上げる。

ゲルググJはタツクルで吹き飛ばされるのを利用してスラストで急速後退し、二撃目を回避。プラズマ化した大剣の餌食からは逃れたが、後ろのゲルググJを内壁の壁とでサンドウィッチしてしまい、前と後ろの両方の衝撃に乗り手は喘いだ。シヨックで脳がシエイクされて、視界がぼやける中、その敵影をどうにか捉え、彼女は怯えた。

盾に描かれた「shield of glory」の文字。純白の機体カラー、間違いない。ノーブルシスターズの一人、アッサムのグフカスタムであった。

『し、白いグフカスタム！ ノーブルシスターズが……何でこんな所に！』

こんな所に居ていいはずが無い敵エースに慌ててビームライフルを向けるが、ライフルをすぐに構えることが出来なかった。何故、と焦るが機体の制御事態に問題はなく、



ますますパニックに陥り、彼女が発砲する前にグフカスタムが先に撃っていた。

左腕に装備された三連想のガトリングガンがビームライフルの長銃身を吹き飛ばし、鉄くずとなったソレをゲルググJはプログラム通り律儀に構えた。

「ハ、このバカMSー！」

グフカスタムはそんな事情などお構いなしにガトリングガンを連射しつつ、再び距離を詰めていく。砲弾は機体の上体を狙っており、装甲が弾きモノアイカメラの前で火花が踊り、白煙がもうもうと立ちこめていった。

——眩しい！ 見えない！

ゲルググJは身をよじり、続く斬撃を偶然ではあったがいなした。小振りに振られていいのか、威力自体は高くないがゲルググの戦闘能力を着実に奪っていく。振り下ろし、横薙ぎ、突き、余熱の残った黒い狂刃が装甲を削り、関節部へと過大な負荷を与えてくる。

耳障りな金属の悲鳴と警告音が聴覚を支配し、それが止まない。

まさに猛撃。何とかビームサーベルを持つとうとサーベルラックに手を伸ばすが、刀の柄尻で吹き飛ばされてしまい、更に腕部関節に鈍器のような一撃が走った。何故、こんな旧型機に！ 乗り手は恐怖と屈辱に顔を歪ませて、グフカスタムを睨むが、それは一瞬で吹き飛んだ。

息が出来ない。目が離せない。黒森峰で最高の機体に乗っているはずなのに、機体が  
//重い//

グフカスタムの気迫が怯えとすくみを生み出し、彼女の、ゲルググJの性能を抑え込んだのだ。

『ちよ、ちよつと！ 離れてよ！ 撃てない！』

『む、無理……！』

けたましいアラーム音と味方の怒声。自棄になって、ステイックを思い切り押し倒し、グフカスタムの右腕部を抑えた。互いの頭部がぶつかりあい、モニターのノイズが走った後にグフカスタムの悪鬼めいたモノアイが大写しになる。

『押し相撲は趣味ではないのですけど』

『こ、このロートルが！』

押し返してやる！ 力一杯ステイックを押し倒し、グフを押し倒そうとする。最初こそ、グフカスタムがやや押され気味になり、脚部からスチームが吹かれた。だが。徐々に。徐々にそれが逆転していく。グフカスタムのモーターが凄まじい回転音を放ち、ゲルググJのフレームを軋ませていく。

先ほどの格闘のダメージが——！

過大な負荷を与えられたことでゲルググが弱ったのだ。じりじりと迫りくる刀の紫



だが、視界を覆ったのはロックオンしたグフカスタムではなく、頭部に真っ直ぐ飛んで来た小さななぎ爪がついた円筒状の物体であった。

グフカスタムのヒートロッドが真っ直ぐ、二機目のゲルググJの頭部へと発射され、その勢いでカメラを含めた頭頂部を根こそぎ奪った。

「メインカメラが！」

視界を奪われた！ トリガーが引かれてビームライフルからメガ粒子の光線が飛び出たが、エネルギーの奔流はグフカスタムの1m上を通過し、エレベーターの方へと突き刺さって爆発する。

その事を知ったのはサブカメラに切り替え、カメラに映し出された無傷の敵機を見ることで乗り手は知り得た。

『すくみなさい！ 怯えるがいいですわ！ 機体性能を生かせないまま、堕ちなさい！』  
アッサムのグフカスタムは早く、ほんの一瞬で距離を詰める。限定空間内でのグフは手ごわいとはまさにこの事と言えよう。ここでは大推力を誇るスラストーや貫通力に特化したビームライフルより、単純な脚力と原始的な格闘兵装が物を言う。

ヒート剣の連撃がゲルググの装甲に叩きこまれ、距離を離そうとバックステップを多用しても尚、グフカスタムから逃れられない。二歩下がれば、更に三歩。四歩下がれば、五歩追い詰められる。猪武者とも言える力技の連続に黒森峰の精鋭がパワー負けし、そ

れはゲルググJの乗り手の怒りを更に煽る形となった。

「嘗めるなあー！」

だが、ヒートサーベルの錆びにされる程、黒森峰も腐つてはいない。取り回しの利かないライフルを捨て、ビームサーベルを引き抜き、迫る黒刃を受け止めた。

メガ粒子が飛び散り、散った光の粒がお互いの装甲を焦げ付かせ、シミを作り出す。両機の上にスパークが走り、一つ目の巨人同士が巨体をぶつけあつた。つばぜり合いをする事で、互いに押し相撲を取る形となり、それは数秒も膠着した。

奥歯を噛みしめる乗り手にアツサムの楽し気な笑い声が響く。

『楽しませてくれますわ』

「このオー！」

たかが、マイナーチェンジのグフの癖に！ 聖グロリアーナの癖に！

5ダース程の苦虫を噛み潰したように、忌々しいグフに怒りの感情をゲルググJの一つ目に込めて、発光させる。

機体のパワーで上回ったゲルググJが押し相撲に勝ち、グフカスタムを押しつける。四歩分下がったグフカスタムにゲルググJがお返しと言わんばかりにサーベルを振ろうとする。しかし、グフカスタムは、アツサムはすぐさま踏ん張りを利かせると、驚くべき行動に出始めた。

刀を握る腕を力をため込むようにしたと思うと、思い切りスイングしたのだ。

「何?！」

アツサムはゲルググに向かってヒート剣の投擲をした。気でも触れたか! ゲルググJは左腕で弾き、無手となったグフカスタムに突撃を敢行しようと踏みこむ。20mの巨人が鋼鉄の床を蹴り、スラストターの轟音と共に突進する。

狙うは心臓とも言える胸部装甲。ビームサーベルを真っ直ぐに構え、白い仇敵相手に加速する。グフカスタムはスラストターで急速後退しつつ、悪あがきをするように三連ガトリングガンを乱射する。35mm弾でゲルググの装甲は抜けない。狙いも甘く、白煙が上がるだけで意味がない。

「終わりよお! 白いのお!」

散らばった空葉きょうを蹴飛ばして、立ちこめた白煙に見えた黒いシルエット目がけビームサーベルを突き立てた――

捕った! 確かな手ごたえを感じ、その狩った獲物を前に舌なめずりをした。

『な、何で――?』

「えっ」

そして、白煙が晴れた時、眼界に見えたのは自分と全く同じ機体であった。片腕を斬り飛ばされた友軍機に光の剣が突き刺さっており、白旗が間拔けな音と共に上がった。

フレンドリーファイア。こともあろうに彼女は自ら進んで共食いをしてしまったのだ。回らない頭のまま立ち尽くしていると、機体に衝撃が走った。

サーベルを持った腕が吹き飛ばされ、宙を舞ったのが見えた。目で追えば、投げたはずのヒート剣を握ったグフカスタムが真横で血の様な赤い目でコチラを凝視していた。全てが罠。そう、乗り手は悟った。あの35m弾は狼狽え弾などではない。視界を潰すための煙幕であり、集中を反らすための釣り餌だった！

ヒート剣がその証拠だ。敵機はヒートロッドで巻きつけ、回収するタイミングすら謀っていたのだ！

エレベーターから這い上がって来た僚機のタイミングを知り得た上での策。しかし、気付いた時に遅い。天高く掲げられたヒート剣の地獄の炎の様なきらめきが彼女の目一杯に映し出される。

『——応答しろ！ こちらコロニー……隊！ 敵の……抵抗激しく！——乱戦に——』

ミノフスキー粒子が薄くなったのか。通信機のレシーバーから声が聞こえてきたが、まともに反応することが出来なかった。此処で、彼女は、彼女等は初めて理解した。

奴らはウサギではない。そして、目の前のコイツは間違いなく——

「コイツは……エースだ」

力のない眩きの後に、ゲルググJの胴体はヒート剣に両断され、コックピットブロッ

クのみを残して、地に伏せた。

試合開始から25分。予想された運命の時間まで、あと五分となっていた。



## 格闘戦

人一人いないゴーストタウン。あらゆる建築物は荒んでおり、錆びた鉄屑のような印象があった。コロニー内と言うこともあって、超高層ビルはないが、それでもMSがどうにか隠れられる程度のビルはあり、かつて人々が生活していた名残を残しているらしく、廃墟のビルを覗けば朽ちたデスクやチェア、数十世代は前のパソコンが置かれたままであった。

かつて、中心街であったであろうメインストリートは植物に浸食され、乗り捨てられたエレカーがそのまま小鳥の巣になっている程であった。不安定な気候のせいか、至る所に水たまりができており（普通のコロニーではまずありえない）、その水鏡が片膝をついて様子を伺う青いサイクロプス、グフを二体反射していた。

ミノフスキー粒子を通常の倍以上に散布し、コロニーの外や都市部外との交信は非常に不安定となり、レーダーは完全に死んでいる。近代兵器で武装しているはずのMSが今頼れるのは目と耳という原始的な物で、至る所で聖グロリアーナのMS隊は身をひそめていた。

『どうです、ルクリリさん』

「ああ、来ているよ。都市部に続々入ってきている」

グフのモノアイがゆっくりと左へと流れていき、敵機の姿を収めた。狭い道路のおかげで三機一組の一個小隊が進むと、縦一列にならざるを得ないようであった。これで、黒森峰お得意の隊列を組んだ射撃だけはどうか免れる。ルクリリは安堵の息を一つ吐いた。

とは言え、ビームライフルの脅威が消えた訳ではない。そして、このコンクリートジャングルもどこかしくも狭いわけではない。一度相手の得意な場所に釣られれば、グフは反撃も出来ずに、蹂躪される。黒森峰は聖グロリアーナの射撃兵装を弾くことは出来るが、その逆はない。

策を弄さねば、まず全滅する。

「そのまま来い。そのまま」

だからこそ、ルクリリ達は息をひそめた。鋼鉄の甲冑とも言えるMSの奥深くに戦意を隠して、その時を待ち続ける。この時、ルクリリはヘルメットを被らずにいたが、被らないで正解だと思った。

汗が止まらない。全身が沸騰したように熱く、ノーマルスーツがサウナスーツのようになっていた。この上、ヘルメットをしていたら、きつと汗で溺れていたかもしれない。しかし、今はその感情を武器にする時だ。

敵であるゲルググが次々と戦闘地域に足を踏み入れていく。その中には赤い西住流やトサカの大きいエリカのゲルググMの姿もある。その姿を見ている時、突然近くから鳥達飛び立った。

そして、瞬時にエリカのゲルググMがコチラに向けてMM P 80を向けた。

『ルクリリさん!』

「待て!」

反射的にトリガーにかかった力を抜き、深呼吸をする。

落着け――

敵は撃つてはいない。銃口から火が出ない限り、動いてはならない。機体を動かさず一秒、二秒、と時間が経過する。磨かれた銃口はコチラを向いており、鬼のようなモノアイがコチラを凝視しているように見えた。

見えているのか、それとも

まだ、敵の全てがコチラの領域に入っていない。それまでは動けない。じれつたい、本当に焦らされ、ルクリリは奥歯を噛みしめた。

落着け――!

焦りや恐怖は剣に表れる、それはMSも然り。狼狽えれば、味方に動揺を、そして恐怖が伝染し、戦線は崩壊する。時間通りなら敵の後詰として内壁部の制圧部隊をアッサ

ムが一人で足止めを開始した頃だ。

そして、宙域ではローズヒップ達が戦っているに違いない。あのじゃじゃ馬娘は真黒な海を大笑いしながら泳いでいる事をルクリリは想像し笑みを浮かべた。

宇宙を飛ぶバカに比べて、自分は地を這っている

グラウンドソナーに耳を傾けつつも思った。我ながら何て泥臭いのだろう。隊列を組んだ白兵戦、聖グロリアーナの伝統を封じた今、自分達は何を求めるのか。それは、伝統を守る気品か。

違う――

勝利の栄光だ。

最後のゲルググが足を踏み入れようとしている。ルクリリはステイツクを握りしめる。この剣と、MSに誓う。これが後に恥と言われようとも、胸を張って声高に叫ぼう。

そして、ゲルググが、敵が全て入った。市街地の奥深くに。自分達の猟場に。

ルクリリは息を大きく、吸った。その意図を察し、かつての青い巨星の愛機たちが一斉に目覚めた。

「ラブサン、スーチョン！ 撃ち方あ！ 始めえ！」

その叫びと同時に赤いゲルググとゲルググMがスラスターで急速に後退した。そのほんの僅かな時間の後に、大量の砲弾とロケット弾が甲高く声を上げながら、市街地に

振りそそいだ。

「ロシアン隊、キヤラバン隊！ 制圧射！」

それに続いて、ロシアン隊、キヤラバン隊のグフ二個中隊が後期型ザクマシンガンを握り、グレネードランチャーと120mのフルオート射撃を見舞った。永い眠りについていた街を叩き起こさんばかりの質量兵器の嵐が吹き荒れた。

大口径の砲弾がクレーターを作り、ロケット弾がモールを吹き飛ばす。熱風が吹き荒れて、人工物を覆っていた緑が焼け落ち、その中で18mを超える巨人たちがダンスを踊るかにように回避行動を繰り返し、蠢いている。

装薬を減らし、弾道を緩やかにしたマゼラドツプ砲と迫撃砲、本来は陸戦型ジムなどが用いるミサイルランチャーなどが黒森峰の頭上を襲う。何機かは被弾し、体勢を崩すも、流石は黒森峰で、すぐに隊を組織し直そうと行動に移る。

だが、そこを見逃すほど聖グロリアーナの古参兵達は甘くはなかった。ルクリリ達はスラストアーを全力で吹かしたジャンプで急接近し、各クラブメンバーはツーマンセル一組でゲルググ隊へと襲い掛かった。

『突撃！ この機を逃さないで！』

『ハ、ハ、ハのー！』

通信はすっかり混線し、敵味方入り混じっている。被弾した一機を庇うようにゲルグ

グがビームライフルを構え、突進してくるグフに引き金を引き絞った。完全にロックオンした一撃、初の撃破となったはずであろう一撃は空中で霧散した。

『ライフルがかき消された！ 何で！』

『まさか！』

『行きますわよお！』

グフ乗りが咆哮し、後期型ザクマシンガンでゲルググに放った。強烈なマズルフラッシュが焚かれ、発射の衝撃でわずかに残った窓ガラスが散り、子供の頭が入りそうな空薬きょうが辺りに飛んで行く。

ゲルググは大型の楯で120mm弾を受け止めつつも、ライフルを二連射するが、いずれもエネルギーの浪費に終わった。圧縮されたメガ粒子が途中で分解され、その破壊力を発揮できない。

『ビーム攪乱膜!』

『落ちなさい!』

距離50mの所まで接近し、ザクマシンガンの弾が切れてマガジンを交換。前面のグフが背中を見せたと思えば、後ろから付いてきていた二機目がフィンガーバルカンを乱射した後に、ヒート剣を片手にゲルググに飛びかかった。

『豆鉄砲なんか……!』

『チエストお!』

マシンガンで傷つけたシールドは限界を超えて碎け散り、オレンジ色に光るプラズマ化した刃がゲルググの左腕を斬り飛ばした。オイルが返り血のようにグフにこびりつき、赤黒い油に汚れた刀を払いもせず、果敢に攻める。

『負けるかあ!』

ゲルググは大胆にもビームライフルを投げつけて、後退すると見せかけて、腰からビームナギナタを抜き放ってグフと切り結んだ。青白いスパークが二機の間に走り、睨みあった。

『聖グロリアーナがゲリラ戦だなんて! 何故今になって!』

『無論勝つため!』

『黒森峰が負けるかあ!』

機体のパワーで勝るゲルググがグフを押し出し、よろめかせた。すぐさま、ゲルググはナギナタを振り下ろしたが、グフは身軽にもサイドステップでこれを回避し、がら空きとなった左を狙ってヒート剣を横薙ぎに振った。

しかし、それを許さないように一条の光がそれを遮った。グフはバックステップで三歩分飛び、リーチの長いエネルギーの刃を辛うじて避けた。両刃のビームナギナタがコンクリートを引き裂き、ドロドロに溶けた鉄筋を散らかす。

『今だー！』

隻腕となったゲルググが身をかがめ、後ろのゲルググが武器を構えた。ビームライフルの下部に装備されたグレネードランチャーの姿が見え、グフ乗りは何を思ったか、スティックを思い切り引き、グフを仰向けに倒れさせた。

『やるなら、やりなさい！ やれるならー！』

『仰せのままにー！』

グフ乗りの叫びに挑発され、ランチャーを構えていたゲルググは倒れた方に照準を合わせた。そこへ、大量の120mm弾が降り注ぎ、ライフルが爆散。間髪を離し、榴弾の炸裂によって右マニピレーター破損を防いだ。

コンマ単位の攻防の中、その外にいた「最初の」グフが得物のリロードを完了させ、撃つたのだと今更ながら、彼女等は気付いた。ザクマシンガンを持つグフは相棒を引きずりながら後退していくのを二機のゲルググは弾幕で進めず、追撃を諦めざるを得なかった。苛烈な砲火は刀持ちのグフがスモークを投げつけるまで終わらず、二機の主は奥歯を噛みしめて自らの失策を呪い、同時に敵の動きの新しさに驚愕する他なかった。

『何て事！ グロリアーナが小隊……いや、それ以下の単位で動いているー！』

『こんな戦闘は初めてよ！ お上品に戦列を組むのに飽きて、ゲリラ戦だなんて……来るぞー！』



話す暇もなく、ゲルググに榴弾が飛来する。二機は狭い市街を縫うように走り、榴弾から逃れるが、その間も戦慄が止むことがなかった。飛び交う通信のいずれもビーム兵器の不調を訴える者が多い。

聖グロリアーナのビーム攪乱膜のせいだ。恐らく最初の砲撃の時に混じって撃つていたのだろうことを黒森峰の乗り手は推測した。大半がゲルググか、もしくはそれ以上の高性能機で固められた黒森峰はビーム兵器が主体である。

攪乱膜はいわば弱点の一つであり、ゲルググ以降のビーム兵器中心のMSには致命的にも思えた。しかし、これまでがそうであったように、黒森峰の機動力を以ってすれば、戦場のコントロールは如何様にも出来る。

攪乱膜を使う暇さえ与えなければいいと言うのが黒森峰の戦術であった。しかし、今回は違う。敵が想定した場所にはいないことで戸惑い、それどころか慣れない機体に乗る者も多く、戦場をコントロールするほどの機動力に欠いた。

『早く狙撃手を！』

『敵は曲射しているのよ！ ビームライフルじゃ、射線が通らない！』

砲兵も狙撃できない。故に市街地から抜け出すことも、また然り。高性能、最精鋭、常勝の黒森峰が不可能の連続に追い込まれている。それは受け入れがたい真実であった。

『油断したと言うの？……こんな……あんなグフなんか！』

油断。最初のあの遅れがこうも無様な結果を招いた。爆炎と白煙の中を隻腕のゲルググはスラスタで滑るように交差点を曲がり、頭上からの悪魔から逃れようとしていた。追うはずの者が追われる。試合は突如として、開始前の予想から一変していた。一方的な試合となるはずが、混戦となり、隻腕のゲルググの乗り手は息を切らせて、繰り返し回避行動を取り続けた。

『こんな、混戦になんか!』

焦りは混乱を呼んで、判断を鈍らせた。走らせた先、白煙の中の、ちようど目の前に一機のググがいる事に気づくのが遅れた。

『何?!』

それでも、ゲルググの乗り手は手練れだったのか、ビームナギナタを振るい、眼前の角が白いルクリリ機を排除しようとした。光刃が蒼い胴体を輪切りにすると思ったのも束の間、機体に電撃が奔ったと近くした時、右腕が引きちぎられていた。

『ひ、ヒート、ロッド……!』

ルクリリ機の目が両腕を失ったゲルググを睨んだ。ルクリリはモノアイを通して、その哀れな敵機を見、ヒートロッドで両足を掬い、転ばせた。道路に横転し、アスファルトの碎けた煙の中にあのゲルググが遂に倒れた。ジオン最高の量産機が全く反応も出ずにググの運動性に翻弄され、ついにマウントを取られたのだ。

「この子の運動性は伊達じゃない。近づけば、ゲルググだろうと勝てるんだ。覚えておけ、圧倒的な機体性能をどう、ひっくり返すかを！」

格闘戦に限れば、グフの性能は末期に製造された高性能機相手でも通用する。それに最初に気付いたのはダーズリンであったことをルクリリは思いはせつつも、言い放った。それは、大昔——WW2時に二ホンという島国で大空を飛ぶサムライ達が旧型機で大陸の高性能機を屠ったように、自機を知り尽くし、愛した者達だからこそ、真似できた所業。

聖グロリアーナと黒森峰の違いがあるとすれば、そこであった。自機を知り尽くし、戦場を知り尽くし、自分の力量に驕らない。基本的だが守るのが難しい戦場のルールをこなしているか否かなのであろう。

『彼を知り己を知れば百戦殆うからず』

それがダーズリンの伝えたい言葉であったのだろう。

ルクリリは押し倒したゲルググの腹部にフィンガーバルカンの銃身を押し付けた。無くした腕を必死に振り回すゲルググを見下ろし、訊いた。その声音は低く、貞淑なお嬢様のモノではなく、誇りを傷つけられたことに憤怒する戦士の様な響きがあり、黒森峰の乗り手は恐怖した。

「『豆鉄砲』だったな？」

短銃身からの75mm弾がゲルググの腹部を引き裂いた。完全なゼロ距離からの掃射にゲルググは痙攣するかのように悶え、5秒間の弾丸の嵐にはらわたを食い散らかされた後に、その目の輝きを失って白旗が上がった。

空葉莢の落ちる音が、勝利への福音となった瞬間だった。それは黒森峰には無形の弾丸となって、衝撃が走り、聖グロリアーナには何よりの鼓舞へとなった。

試合開始から29分。遂に逃れられない現実となって黒森峰の機体が撃破され、運命の時間と言われた、その時まで後一分を切っていた。

## 機動戦

コロニーの外では既に戦端が開いていた。暗黒物質で黒々とした宇宙に爆発の光球がぼつと起こっては消えていく。かつての戦争の名残である兵器の残骸と資源を採掘し終えた岩石が浮き、その間を青白く光る流星が行き来しているように見えた。

無論、それらの流星は本物の流星ではない。18mを超える人型機動兵器MSの推進剤を燃焼して出来た光の尾であり、あるいはビームライフルのメガ粒子の輝きであり、ザクマシンガンから放たれた曳光弾であった。

それはMS道においては当然の事であった。MS同士の戦闘なら日常茶飯事の事で、別段珍しくはない。しかし、今回は違う。試合カードを見て、誰もが驚かざるを得ない事態が起こっていた。

『コイツ等！』

『敵は岩石を利用して防御戦を張っている！ 火力に任せて吹き飛ばせ！』

『敵が見えないのよ！』

ミノフスキー粒子下においては目視による戦闘が基本となる。このガラクタまみれの宇宙ではかくれんぼ程有効な戦術はなかった。

ゲルググキャノンのビームキャノンが火を噴き、極太のビームが三本岩石群を吹き飛ばした。岩の中の水が急速に加熱されて蒸発し、砕けた岩片と白煙が辺りに散らばるが、120mm弾やザクバズーカの280mm砲弾は一切止むことがなく、ゲルググやガルバルティに飛来する。

一機のゲルググJが推進力で強引に突破を試みようとするが、激しい十字砲火を前にして前進と後退を繰り返すしか出来なかった。それは他の黒森峰のMSも同様で、正確な敵意位置が把握できず、火力と機動力による突破と言う十八番を潰され、苛立つばかりであった。

『ツダさえ見つけられれば……！ マズイ！』

二年生の操るゲルググが危機を察知して機体を捻った直後、肩部装甲を徹甲弾が襲い、砕いた。腕部の破損こそ防いだが、黒森峰の校章のど真ん中を貫かれ、誇り高き校名と共に描かれた鉄十字が四散した。

『よくもおー！』

乗り手は怒りに駆られライフルを連射しながら後退する。七発の光条が虚空を奔り、何発かがデブリに命中するが、それだけだった。

聖グロリアーナと黒森峰が戦闘を開始して、黒森峰が攻めあぐねている状況が起こっていたのだ。それは誰も予想できなかった事態であった。空間戦闘では2流と呼ば

れている聖グロリアーナが黒森峰の精鋭相手に戦えるわけがない。それが30分前の常識であった。

何故か、それは聖グロリアーナの唯一の宇宙空間で戦闘可能なMS EMS-10ツダに起因する。この機体は一定以上の加速をすると空中分解する欠陥機でしかないからだ。そんな機体で一年戦争最高の量産機ゲルググシリーズ相手に戦うなど失笑物でしかない。

だが、いざ試合を始めればどうだろうか。

岩石を盾に弾幕射撃と135mm対艦ライフルによる狙撃。設定された3つの陣地エリア内をツダ隊は優秀な機動力を以て行き来し、十字砲火を浴びせ続けている。

「もっとよく狙って!」

「弾幕絶やささないで! 私達はおくまで足止めよ!」

「狩りはあの子達の仕事だものね! 分かっていますわ! そんな事!」

欠陥はあるが小柄で機動性に富んだツダにとって、デブリの中での移動は苦ではない。可動範囲の広い土星エンジンのスラストスターがフレキシブルな機動を可能とし、小回りではゲルググすら圧倒できるのだ。まして、百戦錬磨のツダ乗りにとっては本領発揮と言う所だった。絶えず移動し、攻撃パターンを変える。発見されようと、このゴミの多い宇宙で正確に狙撃するにはそれこそ神業的な予知能力がなければ反応できない。

これが聖グロリアーナの陣地防御。そして、この防御を司るもう一つの要素があった。それこそ、彼女等とは別行動をする二機の影であった。三機のゲルググキャノンが再びキャノンの一斉者を行い、水蒸気によるスモークを展開し、その間隙に突撃しようとしたゲルググJの真上をスカイブルーの機体が猛禽類のように飛びかかった。

「イツヤホウ！」

発射レートを引き上げられたショートバレルのザクマシンガンが嵐のように砲弾を射出し、ゲルググ高機動型のバックパックとスカートを穴だらけにした。推進剤に引火して爆発しバランスを失ったゲルググがフラフラと漂った所をもう一機のツダがすれ違いざまに対艦ライフルで穿ち、爆炎の渦へと案内した。

『なんだ?!』

仲間の復讐と言わんばかりに二機のツダに火力が注がれ、黄色に輝くメガ粒子の奔流が二機を追う。しかし、二機のツダは互いに競い合うように飛び回り、変則的な動きを繰り返しては、加速。何があるかと加速し、黒森峰の射撃の悉くを嘲笑うように回避する。

『その動きは何だあ?!』

「ヒト呼んで！ 聖グロススペシャル！ ですわ！」

「やばい！ やばいですって！ 撃たれまくってますよ！」



場違いなほど明るい声が戦場に響いた矢先、サラミス級の亡骸に隠れていたゲルググがビームナギナタを展開し、襲い掛かった。

『貰ったあ！』

「なんのお！」

「死んじゃう！」

二機はタイミングを同じくしてその場で宙返りし、必殺の一撃を紙一重で避けて見せた。傍から見れば、シンクロナイズドスイミングのようで、少し間の抜けた絵面であったが、避けられた側から見ればたまったものではなかった。ゲルググの眼前に構えられた二つの銃口が火を噴き、あつという間に超鋼スチールの装甲が穴あきチーズにされた。

「今のはお尻がキュツと引き締まりましたわね?! 薫子！」

「だから、こんな作戦やめようって言ったじゃないですか！」

「でも笑ってますわよ！」

「笑えませんが！ 後ろ！」

対艦ライフルを所持する薫子機が後方から来たガルバルティとゲルググに三連射し、けん制。敵側のビームライフルを反動で回避し、弾倉が空になったところで、すかさずローズヒップ機のマシンガンが乱射し、飛び回る。

『クソ！ またか！』

『アイツら楽しんでる！ 宇宙を“泳いで”いるんだ！』

ゲルググ乗りの表現は正しく、まさしく二人は宇宙を泳いでいた。推進剤で飛ぶのはわけが違う。何であろうと二人は加速に利用し、バタバタと手足を動かしては火器管制の予想の斜め上の軌道を描く。

陣地攻略に手を焼いていれば、どこからか襲い掛かる“この二機”に黒森峰のフラストレーションは限界を超えていた。うるさい羽虫程度にしか思わなかったツダに機動戦で放浪されている——それは黒森峰の生徒として屈辱でしかないのだ。機体性能で優っているのに、勝てないと言うことは技量で負けていることの証なのだから。

『あの二機を落として……！』

『挑発に乗らないで！』

『やられっぱなしなんだぞ！』

そのせいで、黒森峰の一部は激昂し、二機の追いかけてここに夢中になった。まとめりを欠くこととなった隙は聖グロリアーナにとっては好機であった。

「Present!」

「FIRE!」

被弾したかと錯覚するほどの白煙と激しいマズルフラッシュが宇宙の闇を一瞬照ら

した。

対艦ライフルを持つツダの編隊が戦列歩兵さながらに一斉発射し、135mmの高速徹甲弾が黒森峰の混乱を突いた。

砲身が後退し、空薬きょうが白煙と共に排出され、高速徹甲弾がデブリを貫通してはゲルググ達の動揺を引き起こした。その中の一発はマゼランの艦体を貫通して、一機の足を粉々に打ち砕いてすら見せた。

吹き飛んだ脚部が回転していき、残っていたミノフスキー粒子と推進剤によって光球へと変わる様を見て、黒森峰のほとんどが歯噛みし、そして例の二機がまたしても飛んでくる。

「ナイスですわ！ 皆さまー！」

「また味方の射線の中に行きますしー！」

荒れ狂う双子星が頭上から、持てるだけの火力を浴びせかけようと、モノアイを光らせた時、ゲルググとツダの合間を一条の光条が両者を別つた。ローズヒップは寸での所で急制動し、コレを回避したが、薫子は一瞬遅れて愛機の足先を焦がした。

「狙撃?!」

薫子が撃たれた方向を見やり、対艦ライフルを三連射し、ローズヒップがザクマシガンで更に援護をした。しかし、二人は続く二射目を回避し敵との距離を見て舌打ちを

した。

「射程外ですわ!」

「例の水色ですわ! 赤星小梅!」

FCSによる判断では、その射程はツダの射撃能力の限界を遥かに超えていた。それだけではない、敵は敵味方入り乱れる乱戦の中で正確に狙撃したのだ。この障害物だらけの宇宙のゴミ捨て場で狙撃など普通はできるわけがない。

そんな芸当ができるのは黒森峰では二人だけだ。西住まほと赤星小梅。そして、前者はこんな場所には来ないことを考えれば答えは簡単だった。

「薰子、退きますわよ!」

「このライフルだって届きます!」

「ダーズリン様の命令の方が大切ですわ! お早く!」

「ああもう!」

奇襲を止められた以上、ツダにできることはない。悔しいがそう判断したローズヒツプの行動は早く、薰子機を引っ張り上げて続く三射目から彼女を救った。逃すか、と二機は黒森峰の猛り狂ったビームライフルの雨を潜り、デブリの中へと踵を返そうとする。

「お二人共! 下よ!」

「何ですって?!」

仲間の悲鳴にも似た警告と同時に、ロケットとビームの猛烈な攻撃が下から浴びせかけられ、二機は左右に分断された。ローズヒップはバレリーナを思わせるロールを三度行い、動物的な勘が働く方へとザクマシンガンをフルオートでばら撒いた。

その勘は正しく、襲撃者を捉えてはいたが、全て回避していた。そして、ローズヒップの前に下手人の姿が大写しとなった。それは紅と黒の高機動型ゲルググであり、黒森峰の色付き、直下機であった。

二機は互いに接近し得物を撃たせまいと絡み合い、互いにヘッドバッドをするようにぶつかり合った。ツダとゲルググの間に火花が散った。コックピット席に座る二人の少女は衝撃に揺さぶられながらも、闘志むき出しに叫び合った。

『韋駄天ローズちゃんかい?!』

「お聞きになるなら、貴女から名乗る物ですわ!」

『黒森峰の直下! 猟犬狩りに参上ってね!』

「オホホ! 負けません事よ!」

直下のゲルググはツダを蹴り飛ばし、ビームライフルを二連射。対するローズヒップは機体をクルリ、と反転させて逃げの姿勢に入り、加速していく。取っ組み合いからドッグファイトへと変わり、星屑漂う海で二機は撃ち合っては互いの間に爆炎の渦を生

み出していった。

「ローズヒップ！」

薫子が叫び、掩護に向かおうとするが、射程外からのビームと二機のゲルググが薫子を追撃しに入っただため、断念せざるを得なかった。

「ローズヒップ！　すぐ行きますから！」

「お紅茶が冷める前に終わらせますから、構いませんわよ！」

二機は離れ、ローズヒップは大胆に言い放つが、相手は黒森峰のキマイラ、直下。一筋縄にはいかない。

直線で最短距離をかつとばす直下に対し、ローズヒップは小回りと機体の軽さでかく乱する。接触すれば一撃で大破してしまうデブリのより狭い場所を通り抜けては待ち伏せや制圧射撃で相手のミスを誘発させようとする。

だが、狭い戦場と言う利を生かせるツダの理想的状況下で直下の動きは信じがたい物だった。直下のゲルググの動きは鋭く、バズーカを囿にしては誘い出し、パワーを生かして接近戦を挑もうとする。

それでいながら、直下のゲルググは未だデブリの破片にすら衝突を許していなかった。

『逃がすか！』

「逃げるとは言つてませんわ!」

ビームナギナタを抜き放つた直下機に対し、ローズヒップは左腕のシールドに備えられた白兵戦用ピックを展開し、岩石に突き刺し、強引にブレーキをかけると同時に振り向き、ヒートホークによる奇襲を浴びせかけた。

「何のお!」

ツダとゲルググは同時に振りかぶり、そして空ぶつた。二機とも距離が離れていくと思つた矢先、ツダはシユツルムファウストをゲルググはビームライフルを全く照準せずに放つち、双方の間に大爆発が生じた。

ビームライフルが弾頭を直撃し、莫大なエネルギーが散らされたのだ。直下とローズヒップは時を同じくしてブラインドショットによって止めを刺そうとし、その結果が互いの死闘を振り出しに戻してしまった。

両者は舌打ちをし、ニヤリと笑つた。

「おやりになりますわね!」

『なら、このままやり合おうか? 私としてもそつちの方がいいんだけど』

「おつことわりですわ!」

黒煙をかき分けて二機が飛び出し、今度は斬り合いを始めだした。ヒット&アウェイによる格闘戦をしつつ、二人はぶつかり合うたびに自分の利を主張し合つた。

「ここを守れとはダーズリン様の命令！　そして私の辞書に後退だとか、駆け引きだとかのまどろっこしい文字はないのですわ！」

『そういうの馬鹿つて言うの！　でもいいさ！　貴女のような子とずっとやってみたかったんだ！　だから、付き合ってたね！』

直下にとって、それは本心でもあり挑発でもあった。此処でローズヒップのような厄介なエースを釘付けにすれば、いずれ本隊が防衛戦を突破する。そう言う計算の元での行動であった。

エースにはエースを。そんな簡単な事で、性能差で劣る聖グロリアーナはたちまちに圧されることは誰の目に明らかであった。

「ここで私を止めれば勝てると思いますか？」

そして13合を超えた剣戟のやり取りの中、突然ローズヒップの言葉が直下に突き刺さった。直下はプレッシャーを感じ取り、ローズヒップの強い瞳を機体越しに見た気がした。

「エースはまだ……いますわ！」

『どこに?!』

「今ですわ！　ニルギリさん！」

直下の問いに応えるように、黒森峰の本隊の上方にキラリと星が光った。一筋の流星



が流れたかと思つた時、ツダを、ゲルググすら遙かに超えた速度でソレは宇宙を駆け、そしてゲルググJの胴体を大きく抉つた。

何が起こつたのか、それを正しく理解できたのは名を叫んだローズヒップのみだつた。彼女はただ得物を構え、突撃したに過ぎないと。その機体は聖グロリアーナの象徴であるギャンと同タイプで、バックパックを装備し、馬上槍を思わせるビームランスが特徴的であつた。

「お前は?!」

「知らないのならお聞きなさい」

姿を見せたのは高機動型ギャン。独立部隊として編成されたニルギリの、そして聖グロリアーナの名誉であるギャンの雄々しき騎士であつた。

「私の名はニルギリ。お覚悟を、皆さま」

ギャンのモノアイが発光し、黒森峰を睨んだ。性能差と言う言葉はニルギリには通用しない。そして、改めて黒森峰の生徒達は聖グロリアーナを強敵として見るこゝとなつた。

何故なら、試合開始から31分。宣告された運命の時間はとうに過ぎ去つていた。